

下道南遺跡

2006

深谷市教育委員会

下道南遺跡

2006

深谷市教育委員会

序

埼玉県北部に位置する深谷市は、平成18年1月に深谷市・岡部町・川本町・花園町との合併により新たなスタートを迎えることとなりました。合併後の深谷市は、北部に利根川、南部に荒川が流れ、変化に富んだ地形や豊富な農産物があり、自然の恵み豊かな土地柄を有しています。

ここには、先人たちの残した足跡が、埋蔵文化財として今なお多く眠っております。なかでも、縄文時代晚期から弥生時代初期の土器を出土した四十坂遺跡・上敷免遺跡や、古代猿澤郡・幡羅郡の役所と推定される中宿・幡羅遺跡などは、埼玉県の原始・古代を考える上で欠かすことのできない遺跡と言えるでしょう。

深谷市では、合併以前から、こうした貴重な遺跡群を保護するために銳意努力してまいりましたが、やむなく破壊を免れない場合は、記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成元年度に民間会社の受託事業として、実施した調査の成果をまとめたものです。小規模な調査でありましたが地域史解明の上では、成果を得られたものと確信しています。

本書が学術・教育関係はもとより、文化財に対する保護・保存の啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成18年10月

深谷市教育委員会
教育長 猪野幸男

例言

1. 本書は、平成元年度に実施した下道南遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査地点の地番は、深谷市棟沢新田171番地である。
2. 発掘調査は、岡部町遺跡調査会が、株式会社オリエンティックの委託を受け実施した。平成17年度岡部町遺跡調査会の解散により、整理・報告書作成作業は、深谷市教育委員会が実施した。
発掘調査及び整理報告書作成期間は、以下のとおりである。

発掘調査 平成元年12月6日～平成元年12月22日
整理・報告書作成 平成18年4月10日～平成18年10月31日

4. 出土品の整理及び図版作成は、島羽政之・宮本直樹・竹野谷俊夫が行った。
5. 本書の編集・執筆は、島羽政之が担当した。
6. 本書に掲載した資料は、深谷市教育委員会が保管している。

凡例

1. 発掘調査位置図は岡部町都市計画図 1 / 2,500を、縮小し使用した。
2. 遺物観察表の数値に（ ）のあるものは推定値、《 》のあるものは残存値を示す。

組織

平成18年度

教育長	猪野幸男	臨時職員	竹野谷俊夫
教育次長	古川国康	〃	黒澤 恵
教育委員会次長	中村信雄	〃	佐藤由江
深谷市教育委員会岡部事務所		〃	布施みゆき
所長	柳田一郎		
所長補佐	鈴木八十子		
主　　査	根岸 宏		
	金井登美子		
	島羽政之		
	森田富雄		
	宮本直樹		

目次

序

例言・凡例・組織

一日次一

I 調査に至るまでの経緯	1
II 遺跡の地理・歴史的環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	3
III 発見された遺構と遺物	15
1. 調査地点の位置	15
2. 調査の経過	15
3. 発見された遺構と遺物	15
IVまとめと考察	20
1. 1号住居跡出土土器の編年的位置	20
2. 藤治川・針ヶ谷堀流域の遺跡群の動向について	21

＜挿図目次＞

第1図 漢文時代草創期の遺跡分布	4	第21図 1号住居跡出土遺物	19
第2図 漢文時代草創期の遺跡分布	4	第22図 下道南遺跡採集埴輪	19
第3図 漢文時代前・中期の遺跡分布	6	第23図 無野遺跡A区7号住居跡	20
第4図 漢文時代後・晚期の遺跡分布	6	第24図 熊野遺跡1次4号住居跡	20
第5図 弥生時代の遺跡分布	8	第25図 新田遺跡B区2号住居跡	20
第6図 藤治川中流域の状況(深谷市本郷)	8	第26図 藤治川・針ヶ谷堀流域の遺跡群とその周辺	22
第7図 古墳時代前期の遺跡分布(集落)	10	第27図 用上北沢遺跡	24
第8図 古墳時代前期の遺跡分布(墳墓)	10	第28図 原坂古墳・玄蕃谷遺跡	25
第9図 古墳時代中期の遺跡分布(集落)	11	第29図 荘山古墳群	25
第10図 古墳時代中期(一部前期末)の遺跡分布(古墳)	11	第30図 路山祭祀遺跡	26
第11図 古墳時代後期の遺跡分布(集落・その他)	12	第31図 千光寺遺跡	27
第12図 古墳時代後期の遺跡分布(古墳・古墳群)	12	第32図 茶臼山古墳群	28
第13図 飛鳥～奈良／平安時代の遺跡分布	13	第33図 平塚古墳	28
第14図 下道南遺跡遠景(深谷市櫻沢新田)	13	第34図 西籠ヶ谷遺跡	29
第15図 針ヶ谷堀と西籠ヶ谷遺跡(深谷市櫻沢新田)	13	第35図 地獄院遺跡	29
第16図 下道南遺跡の範囲と調査地点	15	第36図 中南遺跡	29
第17図 下道南遺跡全測図	16	第37図 石原山瓦窯跡	30
第18図 下道南遺跡1号住居跡	16	第38図 寺山遺跡	30
第19図 1号住居跡遺物分布状況	17	第39図 藤の木遺跡	30
第20図 1号住居跡カット実測図	18	第40図 中山道路	31

【写真図版1】

下道南遺跡全景
下道南遺跡1号住居跡充填状況

【写真図版3】

1号住居跡No.2
1号住居跡No.4
1号住居跡No.3
1号住居跡No.7
1号住居跡No.8
1号住居跡No.10

【写真図版2】

1号住居跡遺物出土状態(1)
1号住居跡遺物出土状態(2)

I 調査に至るまでの経緯

平成18年1月1日、深谷市、岡部町、川本町、花園町の一市三町が合併し、人口約14万6千人、総面積137.58km²の新「深谷市」が誕生した。

このうち旧岡部町域は、埋蔵文化財の宝庫として古くから知られてきた。なかでも、縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡を筆頭に、前期末～中期にかけての弥生土器を出土した四十坂遺跡、県内屈指の副葬品を有する四十塚古墳、櫻沢評・郡家と推定される中宿・熊野遺跡など、各時代を通して著名な遺跡が多く、関係する発掘調査も数多く実施されている。遺跡数は、旧岡部町域で、145箇所が確認されている。

本報告の発掘調査は、平成元年度工場建設にともなう緊急発掘として岡部町遺跡調査会が実施したものである。岡部町遺跡調査会は、平成17年12月をもって解散し、その事業は深谷市教育委員会へ引き継がれることとなった。以下に報告書刊行までの経緯を記す。

1. 発掘調査

下道南遺跡（県遺跡登録番号63-21）は、JR高崎線岡部駅の西方約0.9kmに位置する。

今回報告する調査地は、株式会社オリエンティック（以下事業者と記す）による工場建設に伴う発掘調査である。

事業者は、平成元年6月19日付で、岡部町教育委員会に、開発予定地における埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて照会した。これに基づき教育委員会では、埋蔵文化財の詳細を確認するために試掘調査を実施した。試掘調査では、工場

予定地の一角より竪穴住居跡1軒が検出された。

この結果を踏まえ、岡部町教育委員会では、平成元年11月21日付教社第1236号で、遺構の確認された地点については開発計画から除外することが望ましいが、現状変更する場合は、事前に埋蔵文化財発掘届を提出し、記録保存のための発掘調査を実施する必要がある趣旨の回答をした。

これを受けて、事業者及び教育委員会の協議の結果、発掘調査は、岡部町遺跡調査会に委託することとなつた。事業者よりの発掘届は、平成元年12月6日付で提出された。

発掘調査は、平成元年12月6日から平成元年12月22日にかけて実施された。発掘調査では、事前に確認されていた竪穴住居跡1軒を調査した。住居跡からは、土師器壺・甕・須恵器杯等が出土した。

また、住居跡周辺については、既に大きな機乱を受けており、遺構を確認することはできなかつたが、表土剥ぎの過程において形象・円筒埴輪片が採集された。

2. 整理・報告

調査により検出された遺構・遺物の整理・報告書作成業は、しばらく中断していたが、平成18年度から再開した。

旧岡部町時代において遺物の水洗・復元・実測等は終了していたことから、平成18年4月以降、図面の整理作業、原稿執筆作業を中心に行い、平成18年8月1日から印刷作業を取りかかり、報告書の納品は、平成18年10月31日になされた。

II 遺跡の地理・歴史的環境

1. 地理的環境

下道南遺跡は、平成元年の調査時点では、岡部町大字櫻沢新田に位置していたが、平成18年1月1日に深谷市・岡部町・川本町・花園町の一市三町が合併し、新「深谷市」がスタートした。ここでは、合併後深谷市の地理的環境を概観する。

荒川以北の深谷市域は、地形的には櫛挽台地・本庄台地・妻沼低地に大きく区分される。

櫛挽台地は、荒川左岸に広がる台地であり、荒川により形成された扇状地形を有する。西部は、藤治川・針ヶ谷堀周辺で本庄台地及び山崎山丘陵と区分され、北端部は、福川付近で妻沼低地と接する。妻沼低地と櫛挽台地の境界付近を東流する福川は、櫛挽台地扇端部の豊富な湧水を集めながら、深谷市北部域の農業用水として現在も重要な位置を占めている。

櫛挽台地の標高は、扇頂部にあたる寄居付近で100m程、扇端部は35~50m程である。また、当台地は、荒川の流路変更により形成された段丘が発達し、その形成過程により、櫛挽面・寄居面に大別される。

櫛挽面は武藏野面に対比され、旧岡部町・旧深谷市西南部をのせる。台地上には、藤治川・針ヶ谷堀・西川・上唐沢川・押切川・下唐沢川等の中小河川が北流する。これらの河川は、扇央部から扇端部付近の湧水に端を発し、台地を北流する。一見平坦に見える台地上も、現存する中小河川や、その他の埋没谷による緩やかな起伏があり、その景観は、櫛で挽いた如くである。

寄居面は、櫛挽面以降に形成された段丘面である。櫛挽面とは、寄居高校付近から深谷市下郷、境、折之口、上宿へと連なる崖線で区分される。

この寄居面では、ローム層が比較的厚く堆積する段丘面と、その下位にありローム層の堆積が薄いか認められない段丘面に区分される。前者は御威ヶ原面として別称される。境界の崖線付近では湧水が隨所に認められる。さらに、寄居面形成以降、川本明戸付近を扇頂とする荒川新扇状地が形成される。御駒ヶ原面との境界付近及び扇端部付近は、熊谷市域の重要遺跡が集中する。

本庄台地に相当する地域は、深谷市西端の藤治川・針ヶ谷堀以西の地域（旧岡部町櫻沢地区）である。台地上には、見駒川（小山川）・志戸川・女堀等の中小河川が北流しており、この河川の流域は、低地的景観が見られる。

妻沼低地は、利根川及びその支流により形成された広大な低地帯である。南方で本庄台地及び櫛挽台地と接する。旧岡部町北部・旧深谷市北部が該当し、低地内では、中州的に微高地が形成され、遺跡の立地にも大きく関連している。

この他、櫛挽台地と本庄台地の境界付近に山崎山（標高約117m）・諫訪山（標高約109m）、櫛挽面に仙元山丘陵（標高約98m）と呼称される段丘上の小丘陵が存在する。

一方、荒川以南は、旧川本町域南部が該当する。当地域の南半は、江南台地上にのる。江南台地も荒川の流路変更により形成された段丘面であり、扇状地形を有する。

扇頂部付近の寄居町木持付近では標高140m、扇端部の熊谷市原新田付近では標高45mを測る。この段丘面は、江南面と呼称され、櫛挽面以前に形成されたものである。江南面の下段には寄居面が存在する。この段丘面は、櫛挽台地側のそれと対応する。

江南台地上から下段の段丘面（寄居面）にかけて、荒川の支流である吉野川が東流及び北流し、その流域は狭小であるが低地的景観が見られる。

（引用・参考文献）

- 龍瀬良明 1975 「自然堤防」 古今書院
川本町 1991 「川本町史一通史編」
埼玉県 1978 「埼玉県市町村誌第14巻一岡部町」
埼玉県 1986 「埼玉県史別編3-自然」
深谷市 1969 「深谷市史」
〃 1980 「深谷市史一追補編」
寄居町 1986 「寄居町史一通史編」

2. 歴史的環境

1) 旧石器時代の遺跡

深谷市域における旧石器時代の遺跡は、確認例が少ないが、江南台地上に位置する白草遺跡では、5ヶ所のブロックが検出されており、細石刃をはじめ荒屋型彫刻刀形石器、角二山型搔器、削器、礫器等が出土した。江南台地上には、この他にも寄居町牛無具利遺跡、江南町寺内、山神、西原遺跡などで旧石器時代の遺物が検出されており、該期の調査例の少ない埼玉県北部地域にあって豊富な内容を有している。さらに、山崎山丘陵上に位置する北坂遺跡でも彫器、ナイフ型石器が検出されているが、ブロック等は確認されていない。

2) 縄文時代の遺跡

縄文時代の遺跡動向の把握のため、立地条件、遺跡群のまとまりを考慮し、A～Hの地域を設定した（第1図～第4図）。

縄文時代草創期の遺跡は、深谷市域及びその周辺においてA～F地域に散在する（第1図）。A地域は、本庄台地東端部に位置し、見駒川・志戸川合流域にある。石蔵A遺跡で、御子柴型石器が、東光寺裏遺跡で、微隆起線文土器が出土した。B地域は、櫛挽台地西端に位置し、藤治川・針ヶ谷堀流域にある。当地域の草創期遺跡群は、豊富な内容を有す。西龍ヶ谷遺跡・西谷遺跡・水久保遺跡・沼端遺跡は、多縄文・爪形文土器を出土する遺跡である。C地域は、松久丘陵北縁部から、諫訪山（独立丘陵）にかけての地域である。北坂遺跡では隆起線文・多縄文土器が、如来堂B遺跡では、爪形文・撚糸圧痕文土器が出土した。D地域は、櫛挽台地北東縁から妻沼低地にかけてある。東方城遺跡で有舌尖頭器が出土している。E地域は、櫛挽台地東南縁の地域である。宮林遺跡、沢口遺跡で、該期の遺構が検出されている。この他、土器は検出されていないが、荒川右岸の江南台地上（F地域）において、有舌尖頭器が採集され（上本田地区）、四反歩南遺跡で押圧縄文・矢柄研磨器等が出土した。以上草創期の遺跡分布は、A～F地域において点的に形成される。最も分布密度の濃い地域はB地域である。

縄文時代早期では、B地域において、西龍ヶ谷、西谷、水久保、沼端遺跡が草創期から繼續している。また、茶臼山、中原、北東原遺跡が、新たに

加わり、前段階に比較し遺跡は増加傾向となる。C・E地域は、大きな変化は見られず、A・D地域は、早期段階の遺跡は調査されていない。

当該期の大きな変化として、F地域の遺跡の調査例が激増する点である。重要な遺跡として、撚糸文期の堅穴住居跡が検出された四反歩南遺跡、萩山遺跡などがあげられる。また、百濟木遺跡・白草遺跡では、早期後半段階の炉穴跡が検出されており、舟山遺跡では、早期終末の東海系土器群が出土している。

縄文前・中期は、深谷市域及び隣接地域における遺跡形成のピークにあたる。この段階において櫛挽台地縁辺部周辺（I地域）、櫛挽台地東部の小河川流域（J地域）、荒川左岸西部（H地域）に集落跡の進出が顕著となる。またA～F地域においても規模の大きい集落が存在する。

前期段階では、A地域の宮西遺跡、四十坂遺跡で闇山式後半の集落跡が検出されている。G地域においては、むじな塚遺跡、南大塚遺跡等の黒浜期に最盛期を迎える集落が検出されている。諸磯期では、A・H地域において東光寺裏遺跡・台耕地遺跡・塚屋・北塚屋遺跡等の大規模な集落が調査されている。

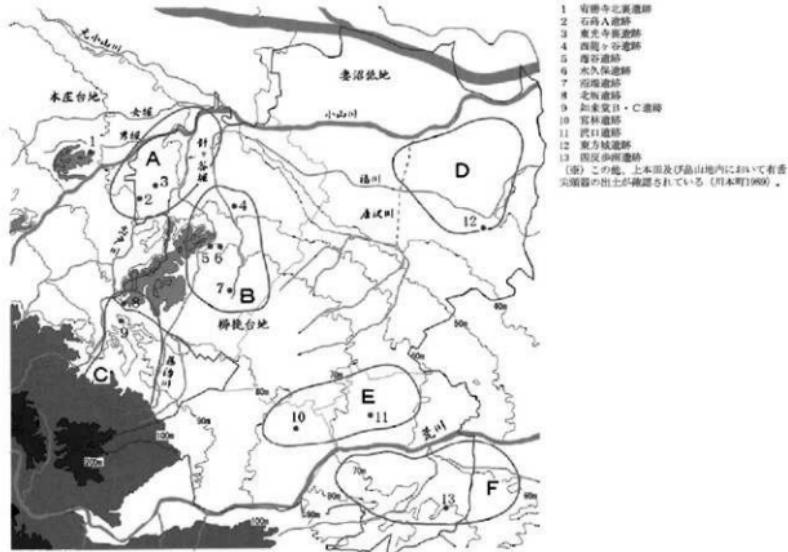
中期段階では、J地域において集落跡の検出例が増加する。小台遺跡・出口・島の上遺跡・萱場松原遺跡などが代表的なものである。これらの遺跡群は、加曾利E式後半段階に盛行する。

縄文時代後・晩期では、D地域における集落跡の検出例が激増する。大きな画期となるのは称名寺～堀之内期にかけてである。当地域の重要な遺跡として明戸東遺跡・新屋敷東遺跡・上敷免遺跡等がある。

その他の地域では、前時代に比較し遺跡数が減少傾向にあり、荒川右岸のF・G地域では、その傾向は顕著である。この中で、東谷遺跡（B地域）、原ヶ谷戸遺跡（I地域）、橋谷、穂ノ下遺跡（H地域）などは、希少な集落遺跡と言えよう。

3) 弥生～古墳時代の遺跡

弥生時代以降については、生業・社会形態の変化等を勘案し縄文時代とは、異なる地域設定を行い深谷市域及びその周辺地域をI～VII地域に分類した。深谷市域及びその周辺の場合、稻作・畑作・



第1図 縄文時代草創期の遺跡分布



第2図 縄文時代早期の遺跡分布

営業・鉄生産などの生産形態が、各地域ごとに遺跡の動向に大きく反映するものと考える。(第5図～第12図)。また、今回設定した地域内部にも遺跡のまとまりが確認でき、これらはさらに小規模な遺跡群として把握できるが、今回は、この次元での記述は行わないこととする。

(I 地域)

櫛挽台地北縁部から妻沼低地にかけての地域であり、福川上流域にあたる。

弥生時代では、四十坂遺跡、樋詰遺跡、森下遺跡、上敷免森下遺跡などで調査が行われている。

特に、四十坂遺跡、上敷免遺跡は、弥生時代前期末～中期にかけての土器群が検出された遺跡として著名である。この点は、当地域が弥生文化波及の先進的役割を果たしたこと示す。

古墳時代前期の遺跡は、矢島南遺跡、起会遺跡、戸森松原遺跡、深谷町遺跡がある。これらの遺跡は、比較的小規模で、地域内において分散的である。また、該期の墳墓では、四十坂遺跡、上敷免遺跡で周溝墓が検出された。

古墳時代中期では、遺跡は増加傾向にある。集落跡では、上敷免遺跡、森下遺跡、戸森前遺跡、起会遺跡、矢島南遺跡、岡部条里遺跡、砂田前遺跡等で、堅穴住居跡が検出されているが、いずれも小規模な集落跡と推定される。

墳墓では、戸森松原遺跡で、方墳～円墳にいたる古墳群が検出されている。中宿遺跡、四十坂遺跡でも該期の方墳が検出された。

古墳時代後期初頭には、集落の規模が拡大する現象を看取ることができる。上敷免遺跡、森下遺跡、戸森前遺跡、起会遺跡、矢島南遺跡、樋詰遺跡、岡部条里遺跡、砂田前遺跡、中宿遺跡、上宿遺跡で堅穴住居跡が検出された。砂田前遺跡、上敷免遺跡は、大規模な集落跡である。

当地域の古墳群には櫛挽台地上の四十塚古墳群、白山古墳群が代表的である。四十塚古墳群は、前期～中期の墳群を経て後期古墳群へと展開する。四十塚古墳は、横矧板無留短甲、五鉢付鏡板、鉄斧等が昭和初期に出土した。古墳築造時期は、5世紀末頃の年代が想定される。当古墳群展開の重要な画期を示す古墳である。

白山古墳群の開始年代については、榛名山二ツ岳の火山灰降下前に開始されていることは明確である。帆立貝式古墳である17号墳は、古墳群の中では唯一帆立貝式古墳である。

開始期のものと想定される。

当古墳群の成立期は、近接する砂田前遺跡で集落が拡大する現象と重なることを勘案すると両者は、対応関係にあるものと想定する。さらに6世紀後半頃には、後の榛沢郡城では最大級の實相寺古墳(前方後円墳・51m)が築造されることから、I地域の優位性が確認できる。その後、四十塚古墳群から、やや距離を置き、お手長山古墳(帆立貝式古墳・49.5m)、内出八幡塚古墳(円墳33m)、愛宕山古墳(方墳・37m)と有力な古墳が築造される。この点は、榛沢評家形成の前提となるものであろう。

妻沼低地側の古墳群では戸森古墳群、上敷免古墳群が存在するが、内容については明確ではない。

(II 地域)

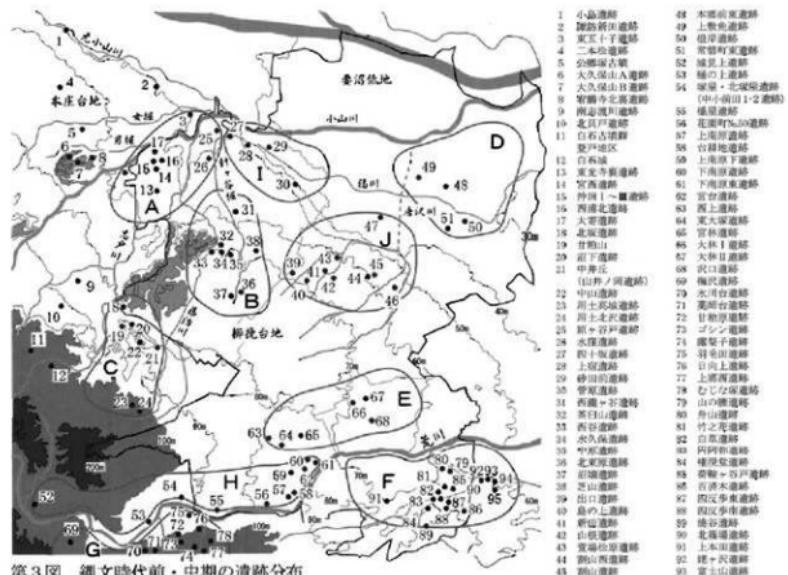
本庄台地東縁部であり、小山川・志戸川・針ヶ谷堀の合流域にあたる。当地域は、古代児玉・那珂郡域に接する地域である。

弥生時代では大寄遺跡から、中期～後期にかけての土器群が出土している。

古墳時代前期の集落跡は濃密に分布する。この点は、I地域の状況とは明らかに異なり、むしろ西方の児玉地域との関係の上で考える必要がある。水庭遺跡、原ヶ谷戸遺跡、六反田遺跡、石蒔A遺跡、地神祇遺跡、宮西遺跡、西浦北遺跡などから堅穴住居跡・溝跡等が検出されている。これらの遺跡は、水庭遺跡を除き、中期～後期へと連続・発展するものであり、当地域は古墳時代を通じ、各集落の立地が比較的限定され、安定した居住域となっていたことを示す。

古墳時代前期の墳墓では、石蒔B遺跡、大寄遺跡、沖田III遺跡などで周溝墓が検出されている。石蒔B遺跡では前方後方形周溝墓を含む11基の周溝墓が調査された。前方後方形周溝墓は、村後、塚本山、南志波川遺跡など古代児玉・那珂郡域に散見される形態の周溝墓であり、この点からも当地域との関係の深さを看取することができる。

古墳群については集落跡の豊富さと比較しづらいといいわざるを得ない。僅かな調査例として東光寺裏遺跡・宮西遺跡で周溝の一部が検出されている。東京国立博物館所蔵品の中には、伝榛沢古墳群出土品がある。以上の状況から、大規模な古墳群が、現在の後榛沢、榛沢集落と重なる位置に存在していた可能性が高い。また、榛沢集落内には、墳丘上の高まりのある地点もあり、埴輪が採集さ



第3図 縄文時代前・中期の遺跡分布

- 1 小島遺跡
- 2 阿賀野川遺跡
- 3 東五丁子遺跡
- 4 二本松遺跡
- 5 木戸山遺跡
- 6 大久保山人跡
- 7 大久保山人跡
- 8 宮鶴今北遺跡
- 9 南志流川遺跡
- 10 北貝戸遺跡
- 11 白石古墳群
- 12 萩戸遺跡
- 13 佐原遺跡
- 14 東光寺新道跡
- 15 桜井一ノ瀬遺跡
- 16 西浦北遺跡
- 17 大堀遺跡
- 18 北坂遺跡
- 19 甘田遺跡
- 20 伊豆郡
- 21 中井庄
- 22 (山形ノ岡遺跡)
- 23 中山遺跡
- 24 川土北沢遺跡
- 25 銀ヶ谷戸遺跡
- 26 佐野遺跡
- 27 岩十遺跡
- 28 上原遺跡
- 29 砂田前遺跡
- 30 管原直遺跡
- 31 西鹿ヶ丘遺跡
- 32 斎白山遺跡
- 33 西谷遺跡
- 34 佐久保遺跡
- 35 甘利遺跡
- 36 北東山遺跡
- 37 前原遺跡
- 38 芝山遺跡
- 39 出口遺跡
- 40 息の上遺跡
- 41 新田遺跡
- 42 朝日遺跡
- 43 安曇田菅原遺跡
- 44 路山西遺跡
- 45 路山遺跡
- 46 小仁遺跡
- 47 滝谷町遺跡
- 48 本郷前川遺跡
- 49 上敷免遺跡
- 50 但馬原跡
- 51 常磐前東遺跡
- 52 丹波前東遺跡
- 53 丹波の上遺跡
- 54 墓原
- 55 花園町7650遺跡
- 56 古賀原遺跡
- 57 上原前遺跡
- 58 古賀原遺跡
- 59 下南河遺跡
- 60 下南河遺跡
- 61 宮台遺跡
- 62 西上原跡
- 63 東大河遺跡
- 64 宮林遺跡
- 65 大堀遺跡
- 66 甘利山遺跡
- 67 横尺遺跡
- 68 水戸山遺跡
- 69 美所台遺跡
- 70 甘利山遺跡
- 71 シンジ遺跡
- 72 甘利山遺跡
- 73 伊豆郡
- 74 伊豆郡
- 75 伊豆郡
- 76 日向上原跡
- 77 上原遺跡
- 78 ひじり山遺跡
- 79 山の上遺跡
- 80 舟山遺跡
- 81 竹之寺遺跡
- 82 伊豆郡
- 83 伊豆郡
- 84 伊豆郡
- 85 伊豆郡
- 86 伊豆郡
- 87 伊豆郡
- 88 伊豆郡
- 89 伊豆郡
- 90 伊豆郡
- 91 上本郷遺跡
- 92 横ヶ丘遺跡
- 93 富士山遺跡
- 94 横尾坂遺跡
- 95 北方遺跡



第4図 縄文時代後・晚期の遺跡分布

0 5km

れでいることも、この傍証となる。

(III地域)

櫛挽台地西縁部であり、藤治川・針ヶ谷堀上流～中流域にある。藤治川は、遺跡、地形のあり方から古代では山河地区付近で針ヶ谷堀と合流していたと考えられる。当地域北端は、この合流域周辺とする。また、藤治川上流域では、寄居町との境界付近で東藤治川、西藤治川と2本の川筋がある。藤治川左岸には、山崎山・諏訪山丘陵があり、古代那珂郡域に接する。

弥生時代の遺跡として用土平遺跡がある。当遺跡は、弥生時代中期の環濠集落であり学史上名高い。

古墳時代前期の遺跡として西藤治川右岸に南藤田遺跡がある。遺跡は、古墳時代後期まで連続し、当地域では中核的な集落である。また、山崎山丘陵上の玄蕃谷遺跡は、3軒の堅穴住居跡から豊富な土器群が出土した。

古墳時代後期の遺跡では西藤治川上流域に調査例が増加する。前述の南藤田遺跡の他、用土前峯、用土台、用土北沢、出羽塚遺跡等集落跡が検出された。この他、藤治川下流域では、柳原遺跡で堅穴住居跡が検出されている。

古墳時代前期から中期にかけての墳墓群では、山崎山丘陵北縁に、千光寺遺跡があり、周溝墓から台状墓への変遷が確認されている。同丘陵上には、数多くの墳墓・古墳が築造されている。千光寺遺跡と同様に周溝墓～古墳移行期の遺跡として洛山古墳群が存在する。

当古墳群では、方墳1基の確認調査が実施されている。また、安光寺1～2号墓も該期の遺跡として重要である。この他に、西山古墳群・諏訪山古墳群がある。それぞれ西山5号墳・諏訪山古墳という前方後円墳が確認されている。これらの古墳群は、立地等から那珂郡域の集落や生産基盤を置く集団に対応するものと想定する。この他、西藤治川上流域では、用土北沢遺跡で古墳時代前期の周溝墓群が検出されている。

古墳時代後期の古墳群では、藤治川上流域に飯塚古墳群、下流域では、千光寺古墳群・茶臼山古墳群が存在する。飯塚古墳群については、その内容は明確ではない。千光寺古墳群では、帆立貝式古墳である千光寺1号墳がある。茶臼山古墳群では、その出土品の一部が東京大学に保管されている。先述のI～II地域に比較し、総じて遺跡は分

散的に存在する。

集落・墳墓以外の遺跡として洛山祭祀遺跡がある。古墳時代中期の遺跡であり、出土遺物として土器、土製品、馬齒等がある。この中で土製品の内容は、豊富であり、人形、馬形、鏡、弓、堅杵、杓子などがある。当遺跡の立地する地点は、古代那珂郡との郡境に近い位置にある丘陵頂部であり、坂・境に關わる祭祀がなされたと考えられる。(IV地域)

荒川左岸域の地域である。西部をIVa地域、東部をIVb地域とした。IVa地域は、上武山地を含む。IVb地域は、背後に櫛挽台地の遺跡空白帯が存在する。

(IVa地域) 当地域では、現在のところ弥生～古墳時代中期の遺跡は確認されていない。このことから、初期農耕社会の段階では、居住域としては不向きな地域であったことは明確である。古墳時代後期に至り、小前田古墳群が成立する。対応する集落は、未検出である。また末原窓跡群の開窓は、現在のところ5世紀末～6世紀前半段階が確実なところとなっている。該期から平安時代に至るまで当地域は、窓跡としての役割を担うこととなる。

(IVb地域) IVa地域同様、遺跡の存在は希薄であるが、台耕地遺跡において古墳時代前期の集落跡が調査されたことは特筆される。古墳時代後期に至ると黒田古墳群・見目古墳群・長在家古墳群がある。黒田古墳群の場合、台耕地遺跡周辺に対応する集落が存在する可能性がある。見目・長在家古墳群と周辺の集落遺跡の対応関係は明確ではない。

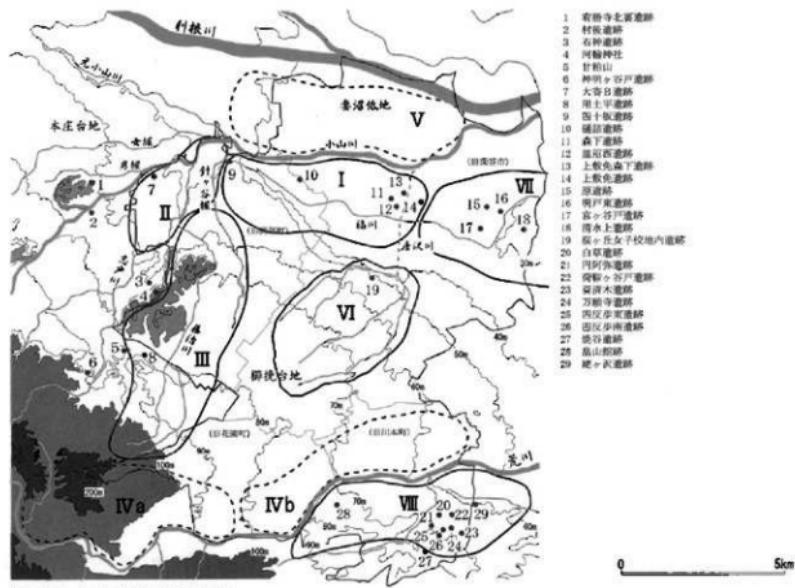
(V地域)

小山川左岸から利根川にかけての地域である。当地域では、下手計西浦遺跡からS字状口縁台付甕を出土する土壙が検出され、祭祀に關るものと推定されている。当遺跡では古墳時代後期の古墳跡4基が調査されており、周辺に対応する集落の存在が予測される。町田西遺跡では、古墳時代後期の集落跡が検出されている。

当地域は、利根川を挟み対岸は上毛野国であり、下手計西浦・町田西両遺跡は水陸交通上の拠点に位置する遺跡と言える。

(VI地域)

櫛挽台地中央部の西川、上唐沢川、押切川、下唐沢流域である。遺跡の存在は希薄であり調査例も少ない。



第5図 弥生時代の遺跡分布



第6図 藤治川中流域の状況(深谷市本郷)

弥生時代では、桜ヶ丘女子高地内遺跡より弥生時代後期の土器が検出されている。近接して董場古墳群が存在する。割山遺跡では、埴輪墓が検出されている。

(Ⅶ地域)

櫛挽台地東部から妻沼低地にかけての地域であり福川中流域にあたる。I 地域とは地形・水利等の面で大きな隔たりではなく、同一の地域として把握することも可能であるが、古代以降は、それぞれ榛沢・幡羅の両都に分かれて編成されることは確実である。この編成は、古墳時代からの地域区分の伝統上にあると推定する。

当地域における弥生時代の遺跡として明戸東、原遺跡、宮ヶ谷戸遺跡などがある。これらの遺跡は、中期後半から後期にかけてのものである。

古墳時代前期の遺跡として明戸東遺跡、宮ヶ谷戸遺跡、清水の上遺跡がある。該期の墳墓として、東川端遺跡で周溝墓 6 基が検出されている。

古墳時代中期の遺跡として、居立遺跡、原遺跡、東川端遺跡、宮ヶ谷戸遺跡、新田裏遺跡があげられるが小規模な集落が多い。該期の墳墓は確認されていない。古墳時代後期に至ると集落は増加し、その規模も飛躍的に拡大する。この現象は、I 地域での集落規模拡大と連動するものであろう。前遺跡、居立遺跡、城北遺跡、八日市遺跡、新屋敷東遺跡などが中核的集落として新規に出現するか、規模を拡大する。古墳群では、木の本古墳群、上増田古墳群、宮ヶ谷戸古墳群などがあり、これらは、前述の集落遺跡に対応する古墳群である。

(Ⅷ地域)

荒川右岸に位置する。江南台地及び低位段丘面(寄居面)に遺跡が確認されている。

弥生時代の遺跡は、島山重忠館跡、白草遺跡、円阿弥遺跡、荷駄ヶ谷戸遺跡、百濟木遺跡、万願寺遺跡、四反歩南遺跡、東遺跡、焼谷遺跡、姥ヶ沢遺跡で確認されている。特に江南台地上の諸遺跡は、吉ヶ谷式を出土する後期に盛行する集落である。

古墳時代前期の集落は、前代に比較し減少する。円阿弥遺跡、白草遺跡、富士山遺跡等が確認されている。円阿弥・白草遺跡は、古墳時代中期まで継続する。前期から中期の墳墓は検出されていない。

古墳時代中期終末から後期に至ると低位の段丘面(寄居面)に集落が確認できるようになる。

如意遺跡は、古墳時代後期から平安時代まで継続する拠点的遺跡であり、周囲にも如意南遺跡、川端遺跡、島山館跡において該期の集落跡が検出されている。また、やや距離を置き、鹿島遺跡がある。江南台地上では、権現堂遺跡、権現坂遺跡、宮下遺跡等で集落跡が調査されている。

当地域の後期群集墳には、塚原古墳群、鹿島古墳群、箱崎古墳群、上大塚古墳群、清水山古墳群、姥ヶ沢古墳群等がある。

特に、低位段丘面に爆発的に築造される古墳群が目を引き、この点は、集落の増加現象と合致するものであろう。

3. 飛鳥～奈良・平安時代

地域区分については、弥生～古墳時代と同じである。以下地域ごとに記述する(第13図)

(1 地域)

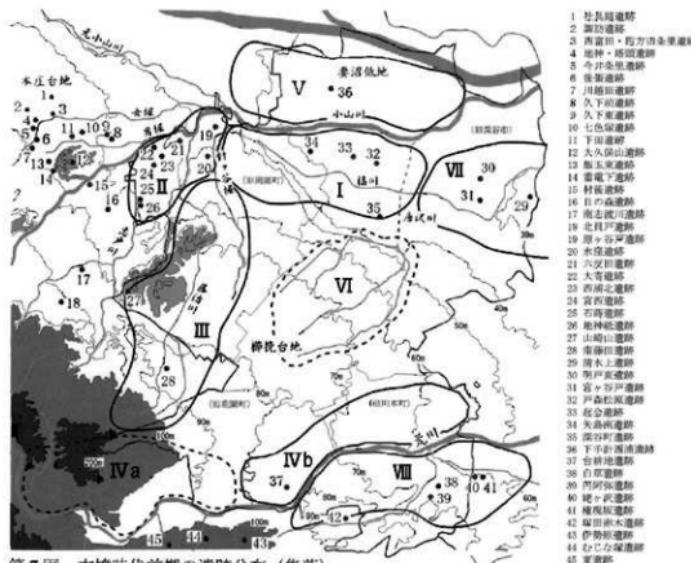
7世紀後半段階では、櫛挽台地北縁に榛沢評家が成立する。その原動力となったのは、古墳時代後期に有力墳墓を築造した在地首長層である。成立時期は、7世紀第3四半期頃であり、熊野遺跡内で検出された大型建物群等が、評家を構成する施設群となる。この時期、白山、上宿、新田等の諸集落が新規に出現するか、規模を拡大する。

中宿遺跡では、7世紀末～8世紀初頭以降倉庫群の建造がはじまり、榛沢郡正倉と考えられる。郡庁院については、中宿遺跡南方の地点が有力であるが、現状では調査できない状況である。この時期台地直下の滝下遺跡では大溝(滝下河川跡)の掘削が開始される。

8世紀前半では、中宿遺跡の東方に岡麻寺が建立される。岡麻寺は、9世紀第1四半期まで存続するが、この段階以降、寺域に堅穴住居跡が進出する。8世紀中頃から後半にかけて低地部に条里型地割が形成されるが、集落遺跡も点在する。低地部の集落遺跡として砂田前遺跡、矢島南遺跡、岡部条里遺跡、橋結遺跡、起会遺跡、戸森前遺跡、森下遺跡、上敷免遺跡等があげられる。

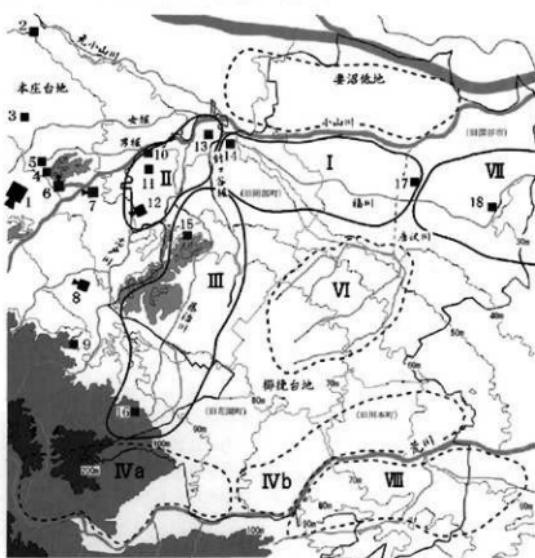
中宿遺跡正倉群周辺には10世紀後半～11世紀代にかけて堅穴住居跡が進出することから、この頃には正倉の機能は完全に失われていたものと思われる。

熊野遺跡では、7世紀末以降、官衙的施設は検出されず、郡家に集う人々の集落としての性格を



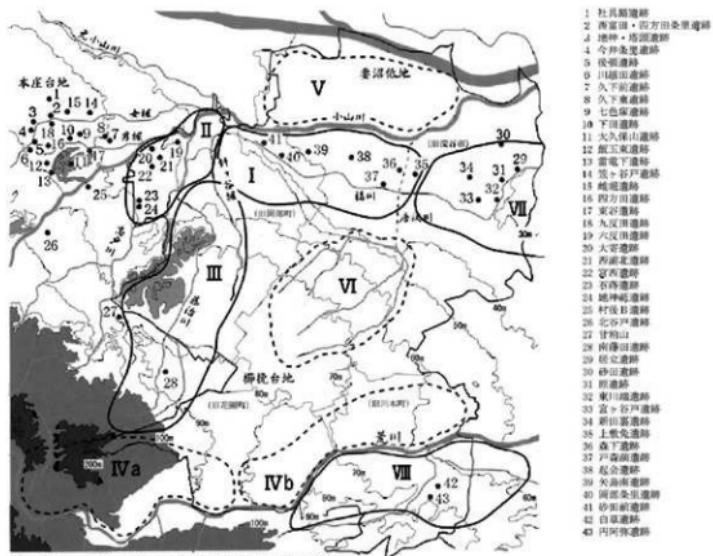
第7図 古墳時代前期の遺跡分布（集落）

- 1 桂井尾遺跡
- 2 游郭遺跡
- 3 西畠田・西方4号集落遺跡
- 4 久下前遺跡
- 5 今力寺遺跡
- 6 後御殿跡
- 7 川越町遺跡
- 8 久下前遺跡
- 9 久下前遺跡
- 10 七色冢遺跡
- 11 下田遺跡
- 12 大久保山遺跡
- 13 稲荷山遺跡
- 14 雪葉山遺跡
- 15 村後遺跡
- 16 日の森遺跡
- 17 南志波川遺跡
- 18 北貝戸遺跡
- 19 崎ヶ谷戸遺跡
- 20 水庄遺跡
- 21 六反田遺跡
- 22 有吉遺跡
- 23 西ノ内遺跡
- 24 宮西遺跡
- 25 石舟遺跡
- 26 地神社遺跡
- 27 山崎山遺跡
- 28 齋藤田遺跡
- 29 濱木上遺跡
- 30 明戸戸遺跡
- 31 畠山分水遺跡
- 32 各務原風穴跡
- 33 稲分遺跡
- 34 矢島山遺跡
- 35 深谷町遺跡
- 36 下手口西野遺跡
- 37 台耕地遺跡
- 38 白原遺跡
- 39 伊野御遺跡
- 40 伊勢遺跡
- 41 横根坂遺跡
- 42 保田赤木本遺跡
- 43 伊勢原遺跡
- 44 むじな保原遺跡
- 45 東置部



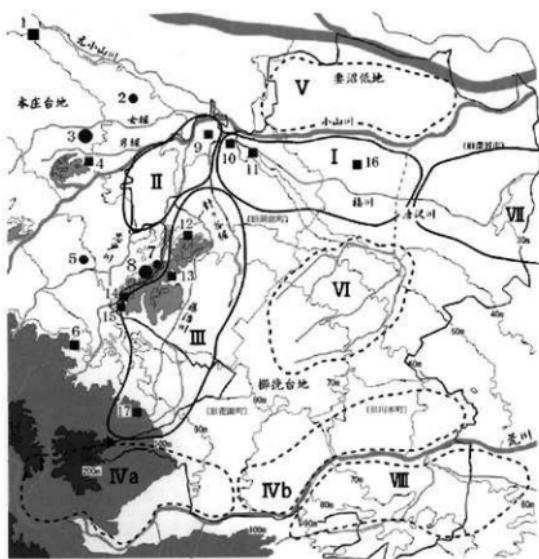
第8図 古墳時代前期の遺跡分布（墳墓）

0 5km



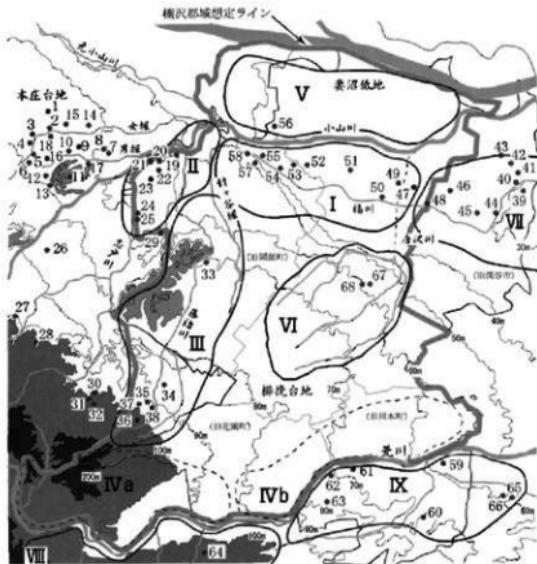
第9図 古墳時代中期の遺跡分布（集落）

- 1 杜呂窓遺跡
- 2 海富田、四方田条里遺跡
- 3 地神、吉原遺跡
- 4 今井東条里遺跡
- 5 今井東条里遺跡
- 6 川原田遺跡
- 7 久下前遺跡
- 8 久下東遺跡
- 9 七色塚遺跡
- 10 下川遺跡
- 11 大久保川遺跡
- 12 鹿王丸遺跡
- 13 鶴見遺跡
- 14 犬ヶ谷石器點
- 15 桃源遺跡
- 16 四方川遺跡
- 17 東彩遺跡
- 18 九反田遺跡
- 19 九反田遺跡
- 20 大曾遺跡
- 21 西湖北遺跡
- 22 萩原遺跡
- 23 萩原遺跡
- 24 鳥神崎遺跡
- 25 村後日置遺跡
- 26 北谷戸遺跡
- 27 甘迫山
- 28 南藤田遺跡
- 29 稲立遺跡
- 30 砂立遺跡
- 31 砂立遺跡
- 32 利川城遺跡
- 33 宮ヶ谷戸遺跡
- 34 稲田基遺跡
- 35 上熊免遺跡
- 36 森下遺跡
- 37 戸森遺跡
- 38 稲会遺跡
- 39 犬伏遺跡
- 40 犬伏条里遺跡
- 41 伊那前遺跡
- 42 白草遺跡
- 43 内河原遺跡



第10図 古墳時代中期（一部前半期未含）の遺跡分布（古墳）

0 5km



第11図 古墳時代後期の遺跡分布（集落・その他）



第12図 古墳時代後期の遺跡分布（古墳・古墳群）

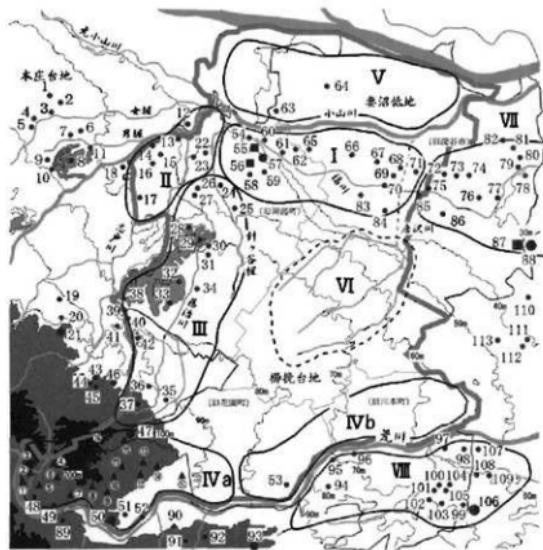
- 1 村長遺跡
- 2 西宮原・四方田
- 3 長澤遺跡
- 4 今井条里遺跡
- 5 長澤遺跡
- 6 川越遺跡
- 7 久下前遺跡
- 8 久下後遺跡
- 9 免免生遺跡
- 10 下田遺跡
- 11 大久保山遺跡
- 12 鶴玉東遺跡
- 13 雪電下遺跡
- 14 管門・谷戸遺跡
- 15 鹿屋遺跡
- 16 四方田遺跡
- 17 今井条里遺跡
- 18 伏見遺跡
- 19 伏見山遺跡
- 20 伏見南遺跡
- 21 駒荷塚遺跡
- 22 大苦遺跡
- 23 西道北遺跡
- 24 宮西遺跡
- 25 石崎遺跡
- 26 地神北遺跡
- 27 地神南遺跡
- 28 伏見山遺跡
- 29 宇陀久保遺跡
- 30 白石遺跡
- 31 岩治原墓羣
- 32 桜森遺跡
- 33 桜原遺跡
- 34 南藤田遺跡
- 35 用土前遺跡
- 36 田北沢遺跡
- 37 田中遺跡
- 38 小羽保遺跡
- 39 鹿瀬遺跡
- 40 田中遺跡
- 41 鹿北遺跡
- 42 鹿内遺跡
- 43 鹿内遺跡
- 44 金子谷遺跡
- 45 金城敷水・本郷遺跡
- 46 金城敷水・本郷遺跡
- 47 上免免生遺跡
- 48 久市遺跡
- 49 斎下遺跡
- 50 丹波前遺跡
- 51 佐多遺跡
- 52 佐多遺跡
- 53 佐多遺跡
- 54 同前免生遺跡
- 55 伊豆前遺跡
- 56 町田西遺跡
- 57 中道遺跡
- 58 木原遺跡
- 59 鹿瀬遺跡
- 60 鹿瀬遺跡
- 61 佐多遺跡
- 62 佐多遺跡
- 63 加利・如意南
- 64 仁多・船形
- 65 仁多・船形
- 66 仁多・船形
- 67 仁多・船形
- 68 仁多・船形

- 1 通・小島古墳群
- 2 畠谷古墳群
- 3 新堂原古墳群
- 4 東京千子遺跡
- 5 (古墳群)
- 6 伏見十戸古墳群
- 7 道高遺跡
- 8 伏見山古墳群
- 9 仁木大穴古墳群
- 10 西山古墳群
- 11 諫治山古墳群
- 12 早里天神山古墳群
- 13 大吉古墳群
- 14 伏見山古墳群
- 15 利根川古墳群
- 16 香門寺古墳群
- 17 駒荷北古墳群
- 18 駒荷古墳群
- 19 駒鹿古墳群
- 20 斎ヶ谷戸古墳群
- 21 斎ヶ谷戸古墳群
- 22 お手長山古墳
- 23 仁木八幡山古墳
- 24 仁木山古墳
- 25 桜堂山古墳
- 26 千光寺古墳群
- 27 白山古墳群
- 28 望月古墳群
- 29 望月古墳群
- 30 望月古墳群
- 31 仁木古墳群
- 32 仁木古墳群
- 33 仁木古墳群
- 34 仁木古墳群
- 35 仁木古墳群
- 36 仁木古墳群
- 37 仁木古墳群
- 38 仁木古墳群
- 39 仁木古墳群
- 40 仁木古墳群
- 41 仁木古墳群
- 42 仁木古墳群
- 43 仁木古墳群
- 44 仁木古墳群
- 45 仁木古墳群
- 46 仁木古墳群
- 47 仁木古墳群
- 48 仁木古墳群
- 49 霧水山古墳群
- 50 仁木古墳群
- 51 仁木古墳群
- 52 仁木古墳群

(注)

横浜都域を示すラインは近世の都城を參照したものである。古代では、自然条件その他の關係で、異なる部分があったと推定される。特に、利根川流域は、利根川、烏川等の亂流により近世以前の国境（郡境）は大きく変動している。したがって地域区分Vの範囲は流動的である。

0 5km



第13図 飛鳥～奈良/平安時代の遺跡分布

(注1)

橿原郡域を示すラインは近世の郡域を参照したものである。

古代では、自然条件その他の関係で、異なる部分があつたと推定される。特に、利根川流域は、利根川・烏川等の亂流により近世以前の国境(郡境)は大きく変動している。したがって地域区分Vの範囲は流动的である。

(注2)

第13図のうち▲は末野窯跡群支群の位置を、○付数字は支群番号を示す。

◎は、板沢支群を意味する。

- 1 牡貝塙遺跡
- 2 南大通篠山遺跡
- 3 西宮遺跡
- 4 稲荷山遺跡
- 5 丹波守遺跡
- 6 七色塙遺跡
- 7 下田遺跡
- 8 大久保山遺跡
- 9 加木東遺跡
- 10 雷藏下遺跡
- 11 丹波守遺跡
- 12 家五十三子遺跡
- 13 六反田遺跡
- 14 大寺遺跡
- 15 菊池之遺跡
- 16 青石遺跡
- 17 石舟遺跡
- 18 佐久間遺跡
- 19 戸戸遺跡
- 20 木部京遺跡
- 21 大日原寺
- 22 水原遺跡
- 23 新井遺跡
- 24 下道所遺跡
- 25 伊豆所遺跡
- 26 幸手遺跡
- 27 地蔵院遺跡
- 28 千牛今遺跡
- 29 石原山瓦窯跡
- 30 西谷遺跡
- 31 柳原遺跡
- 32 佐野遺跡
- 33 今山遺跡
- 34 伊勢方遺跡
- 35 出羽原遺跡
- 36 岩土所窯跡
- 37 用土北瓦窯跡
- 38 丹波守遺跡
- 39 板下遺跡
- 40 中山遺跡
- 41 甘船山遺跡
- 42 間附山遺跡
- 43 間附稻葉遺跡
- 44 川内遺跡
- 45 香取山遺跡
- 46 上ノ瀬遺跡
- 47 古野沢寺
- 48 城見上遺跡
- 49 篠石遺跡
- 50 寂羅寺
- 51 大寺寺遺跡
- 52 佐野下遺跡
- 53 佐野上遺跡
- 54 上宿遺跡
- 55 中宿遺跡
- 56 無野遺跡
- 57 間附寺
- 58 新田遺跡
- 59 白山遺跡
- 60 丹波守遺跡
- 61 朝倉寺遺跡
- 62 楠原寺遺跡
- 63 明治寺遺跡
- 64 下手計南遺跡
- 65 矢島南遺跡
- 66 船合遺跡
- 67 戸森寺瓦窯跡
- 68 丹波守遺跡
- 69 並河南遺跡
- 70 丹波守遺跡
- 71 上牧免遺跡
- 72 本郷前唐崎
- 73 新屋敷東遺跡
- 74 新屋敷西遺跡
- 75 丹波守遺跡
- 76 今ヶ谷戸遺跡
- 77 今森園遺跡
- 78 朝霞遺跡
- 79 初立遺跡
- 80 破北遺跡
- 81 朝日遺跡
- 82 朝日山遺跡
- 83 朝日山遺跡
- 84 朝日山遺跡
- 85 朝日山遺跡
- 86 朝日山遺跡
- 87 朝日山遺跡
- 88 朝日山遺跡
- 89 朝日山遺跡
- 90 甘利郡遺跡
- 91 鶴梨子遺跡
- 92 むじな塚墓群
- 93 東岸原地蔵跡
- 94 山中聖忍寺跡
- 95 朝日山遺跡
- 96 川越遺跡
- 97 霊鳥遺跡
- 98 鹿島平気瓦窯場
- 99 百濟木遺跡
- 100 竹之花遺跡
- 101 白草遺跡
- 102 丹波守遺跡
- 103 丹波守・東道跡
- 104 朝駒ヶ谷下遺跡
- 105 道光寺発発
- 106 寺内発発
- 107 新田黄道跡
- 108 西原遺跡
- 109 丹波守遺跡
- 110 鶴原寺遺跡
- 111 猪の上遺跡
- 112 辻遺跡
- 113 三ヶ谷遺跡

0 5km



第14図 下道南遺跡遠景（深谷市棟沢新田）



第15図 針ヶ谷堀と西龍ヶ谷遺跡（深谷市棟沢新田）

有することとなり、やはり11世紀代まで存続する。11世紀以降の集落の調査例は現状では少ない。10世紀以降、菅原遺跡では、半地下式、中宿遺跡では自立式整形炉が検出されている。

(II 地域)

古墳時代以降成立する集落は、当該期に至っても連続と存続するものがある。

六反田遺跡、大寄遺跡、西浦北遺跡、石井A遺跡、宮西遺跡等が、この種の集落に該当する。また、西浦北遺跡及び隣接する宮西遺跡では、10世紀以降と推定される製錬炉跡が検出されており、当地域は鉄生産の拠点となる。その時期は、明確ではないが10~11世紀代と想定されている。

条里型地割は、榛沢地区西部において残存していたが、昭和50年代に行われた圃場整備において、その大部分が失われてしまった。

(III 地域)

古墳時代後期に比較し、遺跡数が増加し、また特徴的な性格を有す遺跡が多い。

上流域では、中山遺跡、平原遺跡、北坂遺跡、沼下遺跡などで集落が調査されている。中山遺跡では、鉄生産関係の遺構群が多数検出されており、鉄生産の拠点的役割を担う遺跡であったことが判明した。当遺跡での鉄生産は、9世紀末~10世紀初頭に開始され、10世紀後半まで行われている。

これらの集落は、谷を隔て古代那珂郡と接する地域であり、対岸の重要な遺跡との関係も視野に入れる必要がある。特に北坂遺跡は、山崎山丘陵縁辺に位置するが、「中」の焼き印の出土等から那珂郡域に相当する可能性もある。

山崎山丘陵上には、藤治川を見下す位置に瓦塔を出土した藤の木遺跡、軒丸瓦を出土した寺山遺跡、石原山瓦窯跡等があり、丘陵部の開発が進んだことが想定できる。また、針ヶ谷堀右岸には下道南遺跡、西龍ヶ谷遺跡がある。下道南遺跡では、8世紀中頃の堅穴住居跡、西龍ヶ谷遺跡では9世紀代の仏堂施設に推定される建物跡が検出されている。

(IV 地域)

(IV a 地域) 7世紀後半から10世紀にかけて、窯場としての役割を担う。7世紀後半段階では、成立期榛沢評家の熊野遺跡に大量に須恵器を供給することが判明している。周辺評家にも供給しているが、熊野遺跡での出土量は他遺跡を圧倒しており、榛沢評家と末野窯との強い関係が認識できる。

その後、8世紀中頃にやや生産を縮小させるが、8世紀後半から9世紀にかけて、再び拡大する。

この他、箱石遺跡では7世紀末~8世紀初頭段階の製錬炉が検出されており鉄生産の先進性が確認できる。その供給先は、須恵器と同様、評家が大きな候補地となる。

(IV b 地域) 集落跡の検出例は前代と同様少ない。ただし、台耕地遺跡では堅穴住居跡18軒・製錬炉7基・工房跡等が検出され、当地域における鉄生産の拠点的役割を担う。その時期は、9世紀後半~10世紀にかけてとされている。

(V 地域) 下手計西浦遺跡、町田西遺跡がある。

下手計西浦遺跡では、堅穴住居跡9軒が調査されている。この他、帶金具や朱書きされた土器等の特殊な遺物も散見される。町田西遺跡でも掘立柱建物跡が検出されている。

(VI 地域) 該期の調査例はない。今後集落の調査があつたとしても分布密度が希薄であることは変わらないであろう。

(VII 地域) 台地上に幡羅評家が成立し、郡家へと移行する。その成立時期は榛沢評家に近いものと考えられる。周辺には、西別府廃寺があり、出土軒丸瓦には岡廃寺例と同范のものがある。榛沢及び幡羅郡家は、成立状況、立地等に類似性を有す。

また、幡羅遺跡正倉群の終末期は、10世紀後半~11世紀代であり、中宿遺跡の場合と近似している。幡羅郡家周辺には、大規模な遺跡が多く調査されている。新屋敷東遺跡、八日市遺跡、官ヶ谷戸遺跡などで集落跡の調査がなされている。

(VIII 地域)

江南台地上に百濟木遺跡、寺内廃寺があり、その周辺地域にも荷鞍ヶ谷戸遺跡、諦光寺廃寺、竹之花、白草、円阿弥遺跡などが存在する。百濟木遺跡からは、7世紀末~8世紀初頭にかけての居住跡が検出されている。このように当地域は、古代男文郡において拠点的位置をしめるが郡家の所在は、基壇状遺構と岡廃寺・西別府廃寺と同範關係を有す軒丸瓦が出土した東伴場地遺跡周辺の可能性が高いと考えている。

III 発見された遺構と遺物

1. 調査地点の位置

下道南遺跡は、櫛挽台地北部の針ヶ谷堀右岸に位置する。遺跡の標高は、約55m前後であり、眼下には、針ヶ谷堀により形成された狭小な水田が開け、遺跡との比高は、1.5mを測る。調査地の地番は、深谷市権沢新田171番地である。

2. 調査の経過

発掘調査は、平成元年12月6日から22日にかけて実施した。調査面積は、約147m²である。発掘調査実施箇所は、工場建設予定地の東南部の駐車場にあたる。

発掘調査直前に行われた確認調査では、工場敷地の大半は、遺構・遺物ともに検出されなかつたので、駐車場造成予定地の遺構確認箇所に限り本調査を実施した。

遺構確認箇所は、駐車場敷地のほぼ中央部にあたり、古代の整穴住居跡1軒のみが検出されている。遺構確認面は、地表から30cm程掘り下げたローム層上面である。

3. 発見された遺構と遺物

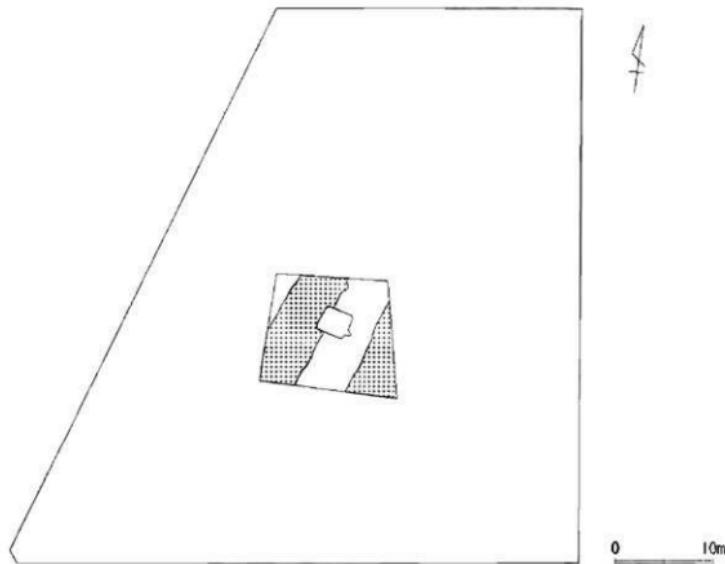
【1号堅穴住居跡】

駐車場予定地の、ほぼ中央部に位置する。長軸は2.88m、短軸は2.40mである。主軸方位は、N-74°-Eである。遺構からの確認面は、30cmであり、住居跡南部は、擾乱を受けていた。柱穴は6ヶ所で検出されている。うち1ヶ所については切り合ひが認められた。床面の状態は硬く、明確なものであった。

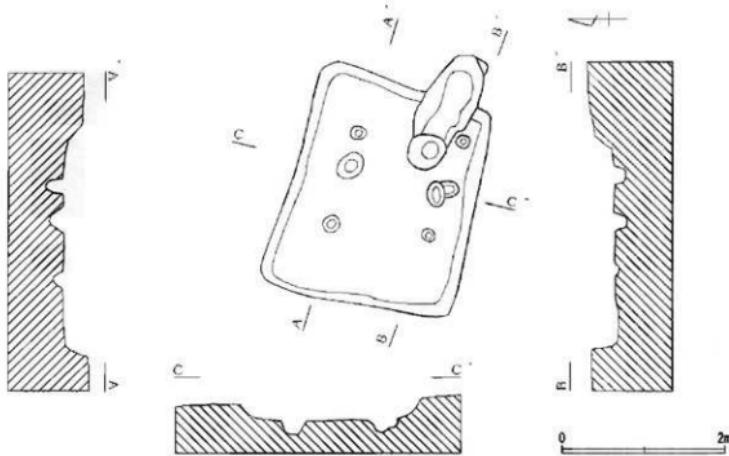
カマドは、東壁を60cm掘りこみ構築されている。袖の痕跡は見出すことはできなかった。前庭部には、長軸66cm、短軸45cmの掘り込みが検出されている。床面からの深さは、6cmである。

遺物では、カマド前庭付近に土師器壺が潰れた状態で出土している。この他にも土師器壺・甕、須恵器壺が床面直上付近で出土した。表土除去の際に、埴輪片が検出されており、古墳跡が周囲に存在している可能性があるが、試掘調査・本調査を含め、その存在は確認できなかった。

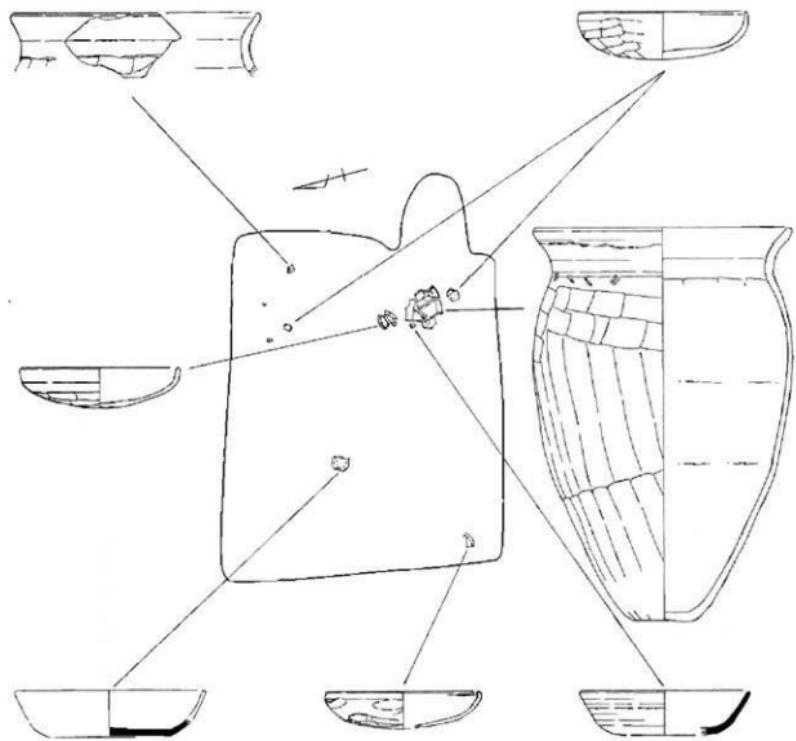




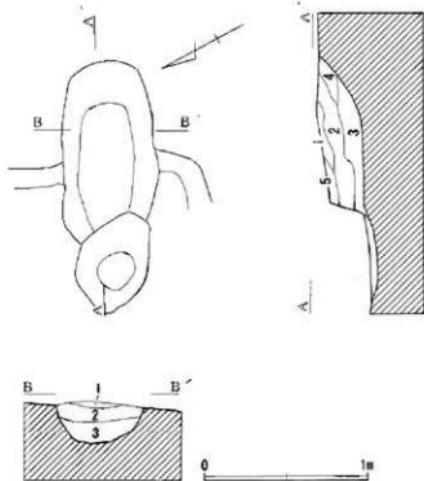
第17図 下道南遺跡全測図



第18図 下道南遺跡 1号住居跡



第19図 1号住居跡遺物分布状況



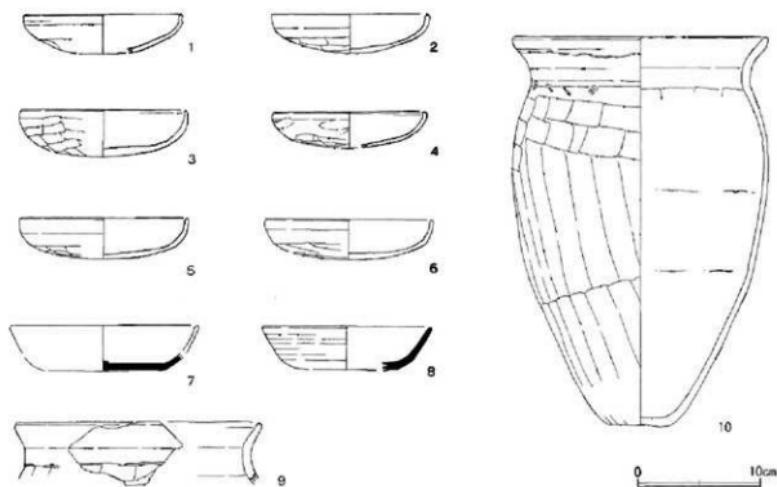
第20図 1号住居跡カマド実測図

1号住居跡出土遺物観察表

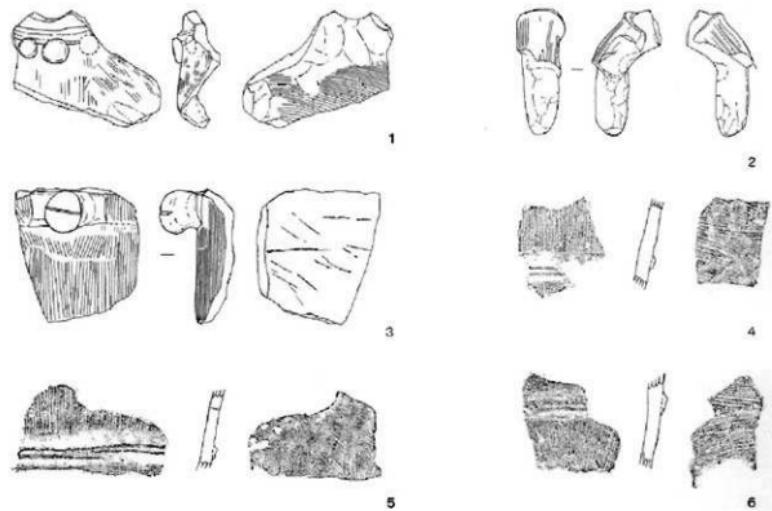
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	壺	(12.8)	(3.2)	—	橙褐色	やや悪	石英、角閃石、微砂粒	図示16%	覆土
2	壺	12.8	3.2	—	橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母	図示85%	図示
3	壺	(13.5)	3.9	—	茶褐色	普通	石英、角閃石	図示45%	図示
4	壺	(12.4)	(2.9)	—	橙褐色	普通	石英、角閃石	図示40%	図示
5	壺	(13.7)	3.3	—	橙褐色	普通	石英、角閃石	図示25%	カマド
6	壺	(13.8)	3.3	—	暗赤褐色	普通	石英、角閃石	図示35%	カマド
7	須恵壺	—	(1.6)	9.5	明灰色	良好	石英、片岩、海綿骨針、雲母	図示90%	図示。底部周辺回転ヘラ、南比企
8	須恵壺	(13.8)	3.6	(8.4)	暗灰～灰白	不良	石英、角閃石、微砂粒	図示20%	図示。底部回転ヘラ、南比企？
9	甕	(20.0)	(5.3)	—	褐色	普通	石英、角閃石、雲母	図示15%	図示
10	甕	(20.8)	32.2	5.0	橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示55%	図示

グリッド出土遺物観察表

番号	種別	色調	焼成	胎土	外側調整	内面調整	備考
1	形像・人物	褐色	普通	石英、長石、片岩、海綿骨針、雲母	タテハケ+ナデ 9本/2cm	斜ハケ+指ナデ 9本/2cm	人物埴輪の首～肩の破片
2	形像・人物	橙褐色	普通	石英、長石、片岩、海綿骨針、雲母	タテハケ+指ナデ 8本/2cm	—	人物の脇か
3	形像・馬形	褐色	普通	石英、長石、片岩、海綿骨針、雲母	タテハケ 8本/2cm	指ナデ	馬の鞍部か
4	円筒	橙褐色	普通	石英、片岩、海綿骨針、雲母	タテハケ 9本/2cm	斜ハケ+指ナデ 9本/2cm	部位第1～2段目、突帯・不整台形
5	円筒	橙褐色	普通	石英、片岩、海綿骨針、雲母	タテハケ 9本/2cm	斜ハケ+指ナデ 9本/2cm	部位第2段目、突帯・不整台形
6	円筒	褐色	普通	石英、片岩、海綿骨針、雲母	タテハケ 8本/2cm	斜ハケ 8本/2cm	部位第1～2段目、突帯・不整台形



第21図 1号住居跡出土遺物



第22図 下道南遺跡採集埴輪

IV まとめと考察

1. 1号住居跡出土土器の編年的位置

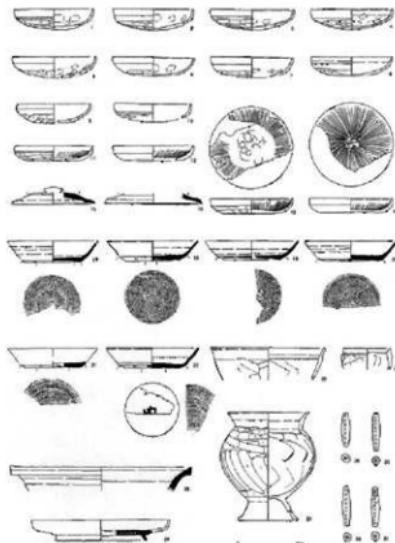
下道南遺跡1号住居跡からは、土師器坏、須恵器坏、土師器甕が出土した。これらは、ある程度一括性を有するものと考える。

土師器坏は、北武藏型坏が主体となり、口縁部は、外反気味のもの(No.1) 内湾気味に直立するもの(No.2~6)がある。器高は、前段階に比較し扁平化していることが大きな特徴であるが、丸底の形態を保っている。

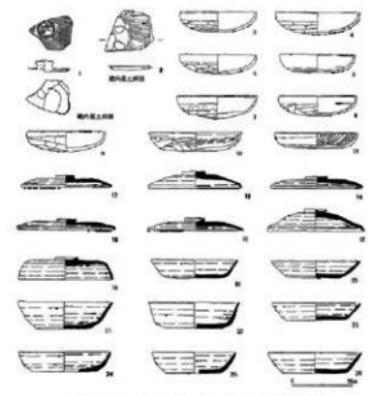
また、土師器甕は、「く」の字に外傾し、口縁部径と胴部上半の径が、近似する形態を有す。また、器壁はやや厚いつくりであるが、胴部上半横削り、下半斜

め削りという「武藏型甕」の特徴を示している。

これらの諸特徴は、富田和夫氏の熊野遺跡編年に照らせば、Ⅲ期に該当するものであり、年代では概ね8世紀後半期があてられよう。土師器類に伴出する須恵器坏は2点とも南比企産の可能性が高い。口径が復元できるNo.8は13.8cmであり、古相段階では小型のグループである。周辺の代表的な例として、内出遺跡12号住居跡(鬼形他1986)、新田遺跡B区2号住居跡(赤熊2000)、熊野遺跡A区7号住居跡(富田2002)、熊野遺跡1次4号住居跡(深谷市教委2006)などがあげられ、出土例が増加しつつある。



第23図 熊野遺跡A区7号住居跡



第24図 熊野遺跡1次4号住居跡



第25図 新田遺跡B区2号住居跡

2. 藤治川・針ヶ谷堀流域の遺跡群の動向について

既に立地と環境において、下道南遺跡を含む藤治川・針ヶ谷堀流域の特徴について触れているが、ここでは、下道南遺跡周辺地域の遺跡群の内容についてさらに詳しく触れ、下道南遺跡理解の一助としたい。

藤治川・針ヶ谷堀流域は、幅狭な谷地形が細長く伸びており、弥生～奈良・平安時代にかけて、断続的な地域開発がなされたものと推定できる。

また、西部は山崎山・諫訪山丘陵、東部は、櫛挽台地中央部の遺跡空白帯と接することにより、比較的限定された地域設定が可能な地域であり、第Ⅱ章においてⅢ地域として分類した。当地域は以上の状況から、集団間の関係や遺跡の動向を比較的のいやすい地域である。

藤治川上流域の調査では、用土北沢遺跡（寄居町）の調査事例が注目される（第27図）。当遺跡からは、古墳時代前期の周溝墓から後期古墳への変遷がたどれる。このような事例は、藤治川下流域の千光寺遺跡（第31図）に共通性を見いだすことができる。この他、藤治川とはやや距離を置くが、諫訪山丘陵上に位置する玄蕃谷遺跡1～3号住居跡も古墳時代前期の豊富な土器群が検出されている（第28図）。さらに、中流域の貉山古墳群でも、方墳が確認されていることから、藤治川流域及びその周辺において、複数集団の存在が確認できる。貉山古墳群に隣接する貉山祭祀遺跡は、古墳時代中期に遡る可能性が指摘されている（深谷市教委2006）。貉山古墳群及び祭祀遺跡周辺は、藤治川流域において重要な位置を占める（第29～30図）。このように狭小な谷水田を生產基盤とした各所に点在する集団は、水利面において深い関係を有さざるを得ず、藤治川・針ヶ谷堀流域に農業共同体的な関係が想定されるのである。

7世紀後半～8世紀前半代に位置づけられる遺跡は、現在のところ少しが、下道南遺跡（本報告）、地福院・中南遺跡（第35～36図）、用土北沢遺跡での検出例が明確なものである。

地福院遺跡、中南遺跡、下道南遺跡は、針ヶ谷堀中流域に所在する遺跡であり、いずれも小規模な調査事例であるが、7世紀末頃以降成立する集落跡が検出された意義は大きい。今後これらの集落跡が前代からどのような過程を経て形成されたのかに留意する必要がある。

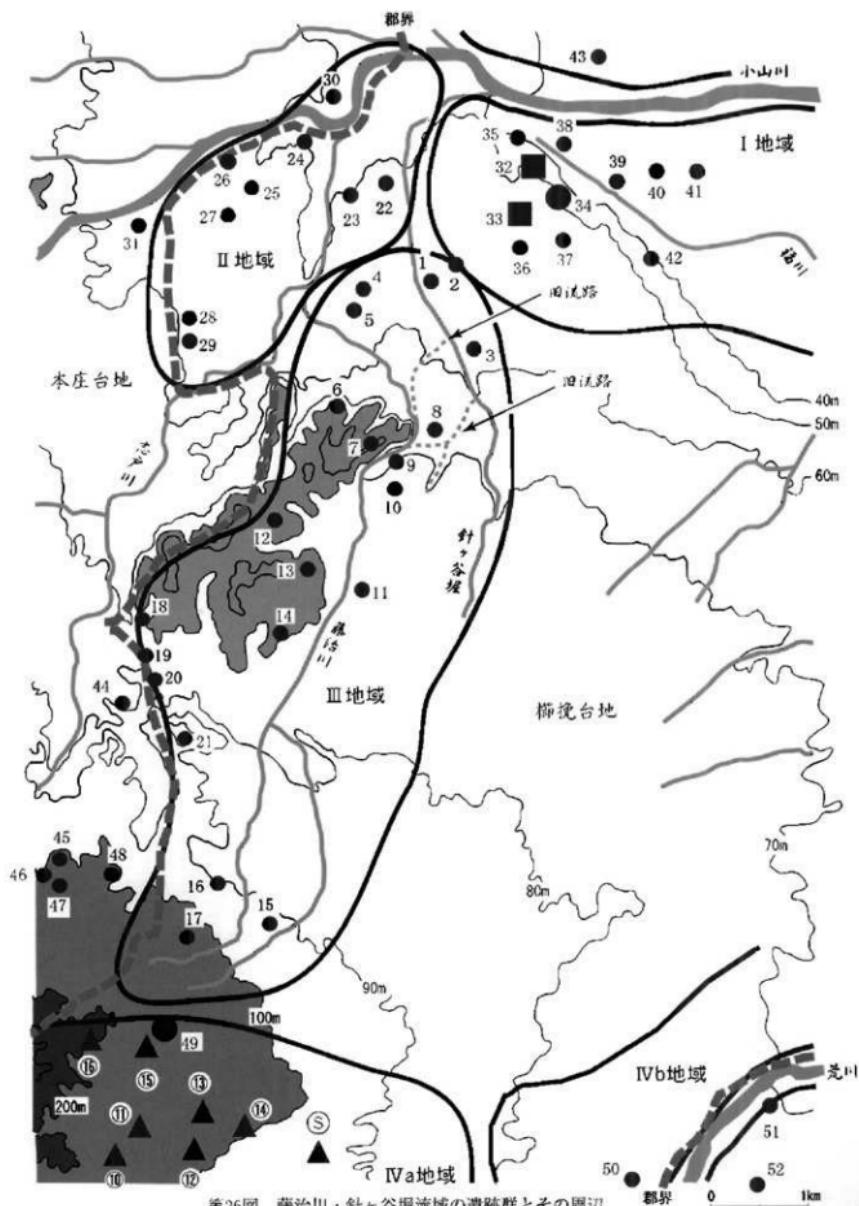
西龍ヶ谷遺跡は、下道南遺跡から800m東南に位置する遺跡である（第34図）。古代～中世にかけての遺構・遺物群が豊富に検出されている。特に9世紀代の住居跡群と掘立柱建物跡の関係は注目される。掘立柱建物跡は、3間×2間の四面庇付建築である。身舎には床東がある。当遺構は、仏堂施設の可能性が高いものとされている（井上2006）。

また、寺山遺跡・石原山瓦窯跡（第37～38図）では、いずれも軒丸瓦をはじめとする遺物類が採集されている。前者からは、8世紀前半代、後者は9世紀後半代の軒丸瓦が採集された。発掘資料ではないため、遺跡の性格は明確でないが、山崎山丘陵裾部において当該期の寺院あるいは瓦窯の存在を暗示する。同一丘陵上にある藤の木遺跡は、瓦塔出土地として学史上著名である（第39図）。池田敏宏氏の分類に照らせば上西原類系であり、年代的には9世紀後半段階が想定できる（深谷市教委2006）。当遺跡は、藤治川流域の谷水田を見下ろす丘陵裾部に位置する。

先述の西龍ヶ谷遺跡・寺山・石原山瓦窯跡との状況をあわせて考慮すると、8～9世紀代において当地域と仏教との関係の深さを読み取ることが可能である。仏教信仰が在地の開発や集団関係に一定の役割を果たしたことが推定される。

やや時期が下る10世紀から11世紀にかけては、中山遺跡が鉄生産の拠点的役割を担う（第40図）。

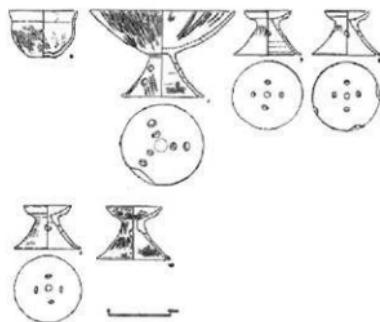
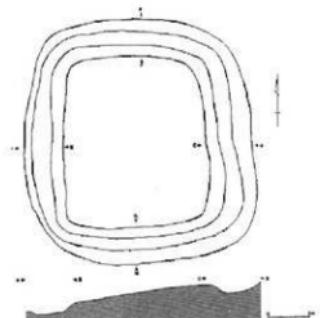
この時期、棟沢郡城は、各地域に鉄生産の拠点的役割を有す遺跡が確認できる。I地域には菅原遺跡・中宿遺跡が、II地域には、西浦北遺跡が、IV地域には台耕地遺跡が所在する。このような、郡内各地域の鉄生産は、在地有力層が積極的に関与したことが想定されるが、熊野遺跡で検出された連房式鍛冶工房に象徴されるような、評・郡司層が主導したものとは質的に大きく異なる。また鉄生産関連遺跡の分布を見ると、郡域に分散的に存在し、9世紀後半～10世紀以降活性化することから、各地域での新興勢力が関与したものと考えられる。郡家を象徴する施設である棟沢・幡籬郡の正倉遺構が10世紀後半以降、次第に衰退する現象と鉄生産の郡内地域への拡散現象は、伝統的な社会の崩壊と新たな時代の始まりを象徴する出来事ではないかと思う。



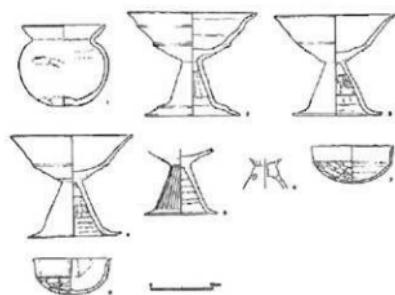
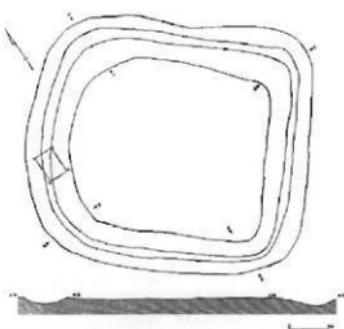
第26図 藤治川・針ヶ谷堀流域の遺跡群とその周辺

地名表

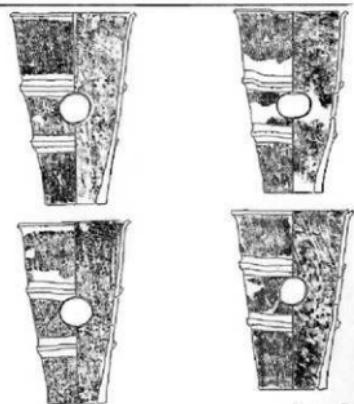
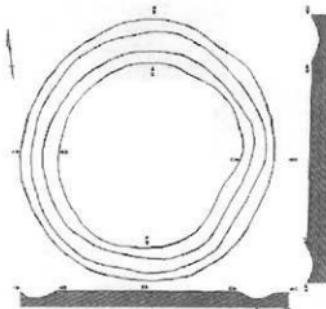
No.	地名	内 容	参考文献
1	下高井戸跡	世紀中期の窯穴と廻転船を複数発見。本研究遺跡。	本報告
2	平塚古墳	銅電化鉄式石室を有す。藤川右衛門の吉野耕中の一基。	鎌谷市教委2006「岡部町史-原始・古代資料編」他
3	西郷+心遣跡	獨立柱建物（仏龕施作）及び焼土窯跡群あり。リビング化。	*
4	中南道跡	7世紀後半以降成立する集落跡。	東京電力調査「中南道跡」、2004
5	根羽越跡	*	滋賀県教委2006「同町史-原始・古代資料編」2006
6	千光寺遺跡	方形周溝墓へと変遷する猿張跡及び平安時代墓葬。	扇谷市遺跡調査会の「千光寺」
7	石原山瓦窯跡	少世紀代の瓦窯跡。斜面地であることから傾斜の可能性あり。	扇谷市教委2006「同町史-原始・古代資料編」他
8	新吉山古墳群	柄谷時代に出土。東京大学に収蔵。古墳跡1基調査。	八木大三郎他2002「武藏國大山郡本郷村吉野調査報告」
9	芦谷跡	平安時代集落。	更衣市歴史学会誌第11号(1995) 滋賀市教委2006「同町史-原始・古代資料編」
10	柳原遺跡	古墳・平安時代集落。	安曇野市教委2006「同町史-原始・古代資料編」
11	伊勢方遺跡	平安時代集落。	(財) 埼玉文2006「伊勢方遺跡」
12	猪古古墳群	古墳時代中期の想定遺跡出土。隣接して方墳が検出。	滋賀市教委2006「同町史-原始・古代資料編」他
13	草木遺跡	瓦窯跡と推察される。	右近市教委1982「武藏國の木の瓦窯跡」史跡と芸術24号他
14	今山遺跡	瓦片採集。	扇谷市教委2006「同町史-原始・古代資料編」他
15	田原塚遺跡	*	寄居市教委1999「同町遺跡」
16	用土堀遺跡	*	奈良町遺跡調査会1996「用土堀遺跡(第2次・第3次)」
17	川上北沢遺跡	古墳時代前期～中期の集落群・復興耕種場。古墳～平安時代集落。	新苦谷教委2009「川上北沢(3次)」
18	北坂遺跡	獨立石壇跡。堅穴式石室が剥離的に配置。「市」被印出土。	新苦谷教委1999「川上北沢(4次)」
19	平坂遺跡	瓦舟・平安時代集落。盤作式掘溝・獨立石壇跡検出。	(財) 埼玉文2002「川下・平坂・甲山・川金森・中津谷・鶴巣・水沢・勝久保・勝久坂遺跡」
20	沼下遺跡	*	寄居町教委1999「沼下遺跡(第3次)」
21	中山道跡	古生代開闢跡が検出される。	新苦谷遺跡調査会1999「中山道跡(第1次・第2次)」他
22	木浦遺跡	古墳・平安時代集落。後削右側壁検出。	新苦谷教委1979「木浦・新井跡の調査」
23	新井遺跡	土師器遺跡と検出。瓦舟・平安時代集落。	新苦谷教委1977「木浦遺跡の調査(第2回)」
24	六反古遺跡	古墳時代前期～平安時代まで断続的に遺構が検出される。中核的集落。	六反田遺跡調査会1993「六反田」
25	西浦北遺跡	古墳時代前期～平安時代まで断続的に遺構が検出される。既生産関連構造あり。	扇谷町教委1983「西浦北・宮西」
26	*大前遺跡	古墳時代前期～平安時代まで断続的に遺構が検出される。	同上
27	官宿遺跡	古墳時代初期～平安時代まで断続的に遺構が検出される。	同上
28	石荷遺跡	古墳時代中期～平安時代まで断続的に遺構が検出される。而溝墓群検出。	同上
29	埴塚紙遺跡	古墳時代後期～後期・大淮からは古墳時代前期～後期の遺物が大量に出土。	同上
30	東五十子遺跡	*	東五十子遺跡調査会2002「東五十子・川原町」
31	古川御遺跡	古墳・平安時代集落。	寄居市教委1978「東川・前川弓寺境・古川編」
32	中宿遺跡	鍛冶所・倉庫跡20個が検出された。存続時期は7世紀末～10世紀初。	同上
33	野原遺跡	鍛冶所・家業用土蔵検出。7世紀紀末3世紀成立。野原遺跡・大堀遺跡・物語式鐵工房・石組・砂輪など豊富な遺構群が検出される。鍋内土器・器足・瓦面等などが出土。	同上
34	圓福寺	基礎式磚塊様。8世紀前半に建立。	同上
35	上前遺跡	*	同上
36	新宿遺跡	古墳時代後期～奈良・平安時代まで継続する集落。	同上
37	新宿遺跡	飛鳥～平安時代まで継続する集落。	同上
38	白山遺跡	飛鳥～平安時代まで継続する集落。	同上
39	伊田遺跡	古墳時代中期～平安時代まで継続する集落。古墳時代後期細胞層が検出。	同上
40	同部条遺跡	古墳時代集落。条字古跡確認。	同上
41	備前遺跡	多里里遺跡構成の「穴門」切妻造確認。	(財) 埼玉文1991「備前・戸森の」
42	久島南遺跡	古湧時～奈良・平安時代集落。	(財) 埼玉文1994「久島南跡」
43	菅原遺跡	平安時代鬼舟・既生産関連遺構あり。	(財) 埼玉文1996「菅原遺跡」
44	町田西遺跡	古墳・平安時代集落。独立柱建物検出。	既生産教委1991「町田西遺跡」、同教委1995「町田西(第2次)」
45	笠置山	瓦窯跡・土器・瓦窯跡等が検出。從而してあり。(笠置山遺跡)。	扇谷市教委1990「笠置山」
46	鶴見里遺跡	古墳・平安時代集落。	美里町教委1999「鶴見里集落・川向遺跡・森後遺跡」
47	森後遺跡	*	同上
48	上野遺跡	神社遺跡(?)後山。	美里町教委2000「上野遺跡」
49	吉野寝寺	古代寺院跡。確認調査実施。	本報告
50	台原地遺跡	平安時代集落。既生産関連遺構あり。	(財) 埼玉文1984「台原地(日)」
51	如意・如意南遺跡	古墳時代中期～平安時代まで続く中核的集落。	(財) 埼玉文2000「如意・如意南」、(財) 埼玉文2004「如意南遺跡目」、(財) 埼玉文2001「如意山」、(財) 埼玉文2006「如意山」
52	嵐山鬼志郎跡	古墳・平安時代集落。	川本町教委1999「嵐山鬼志郎」・5次調査の報告



10号墳

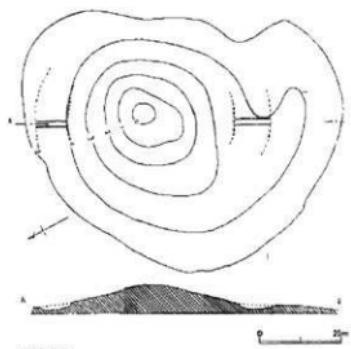


4号墳

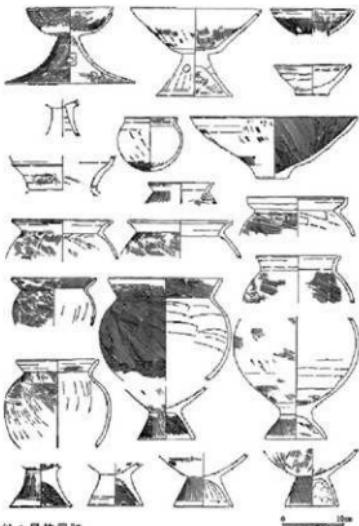


6号墳

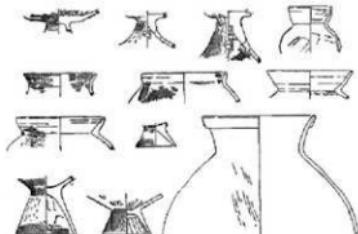
第27図 用土北沢遺跡



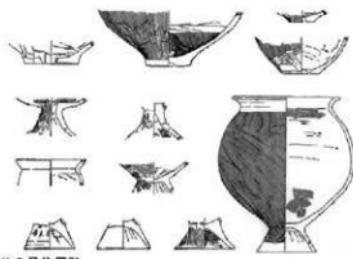
長坂古墳



玄蕃谷 1号住居跡



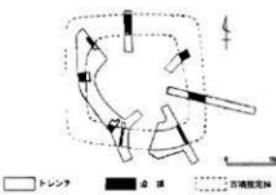
玄蕃谷 2号住居跡



第28図 長坂古墳・玄蕃谷遺跡



第29図 猪山古墳群





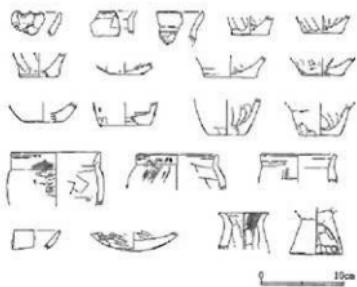
— 10cm —



— 10cm —

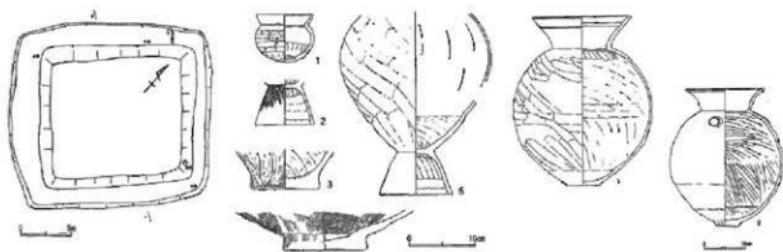


— 10cm —

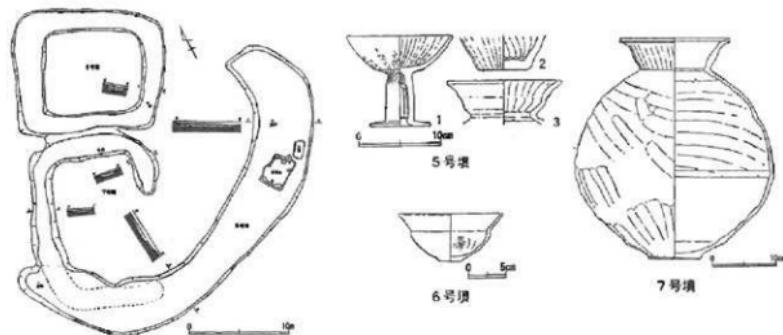


— 10cm —

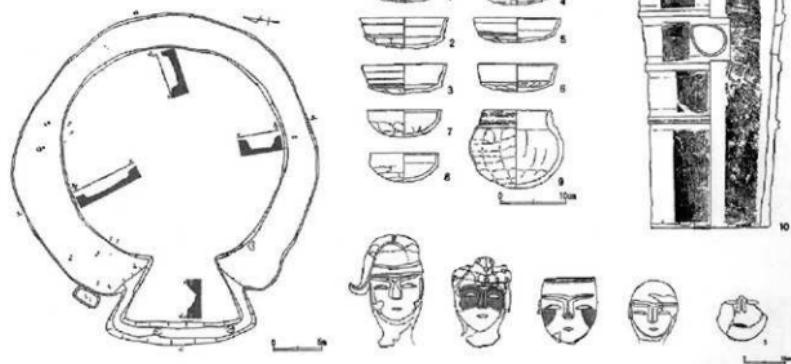
第30図 狐山祭祀遺跡



4号埴

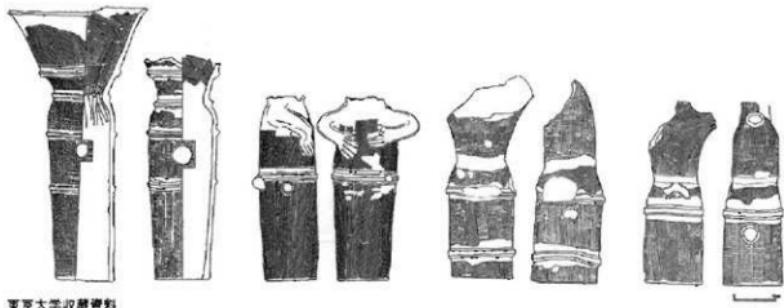
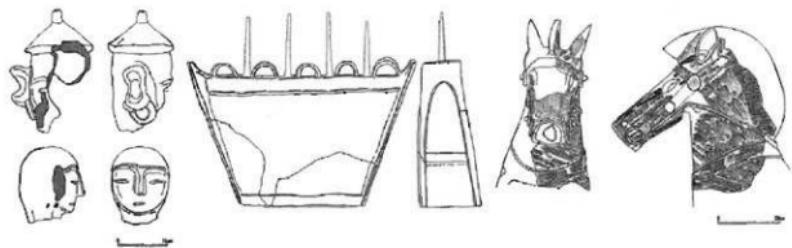


5~7号埴

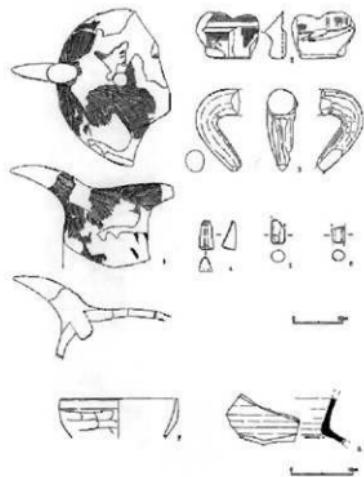


1号埴

第31図 千光寺遺跡



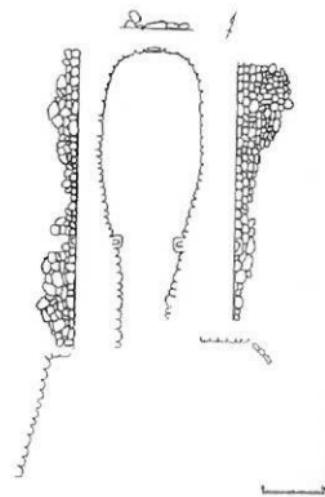
東京大学收藏資料



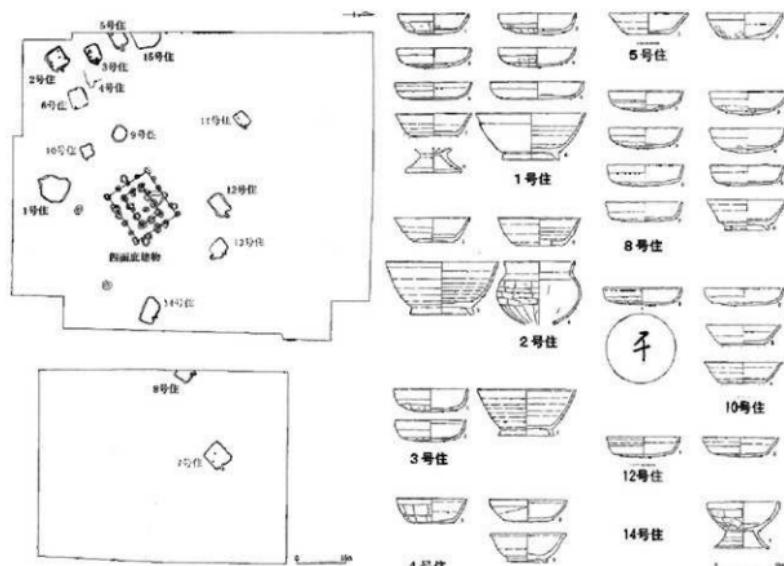
1号墳

第32図 茶白山古墳群

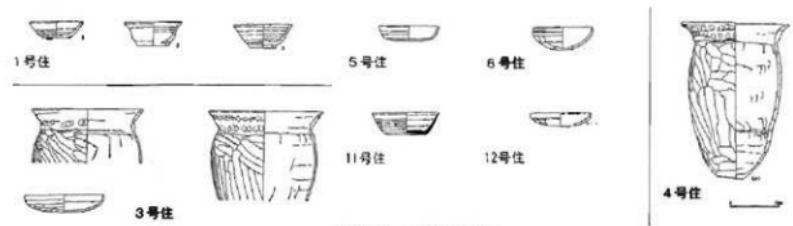
— 28 —



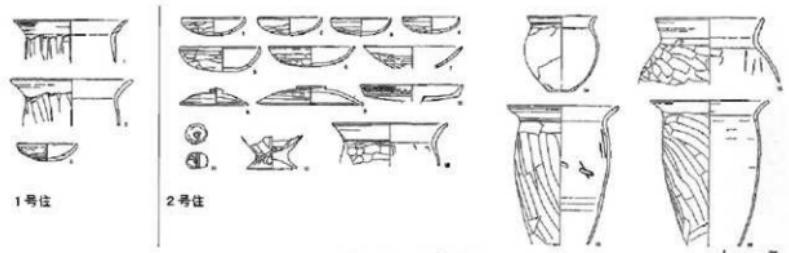
第33図 平塚古墳



第34図 西龍ヶ谷遺跡



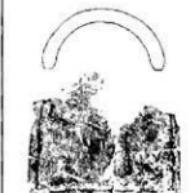
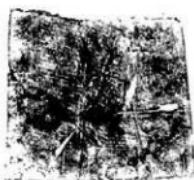
第35図 地福院遺跡



第36図 中南遺跡

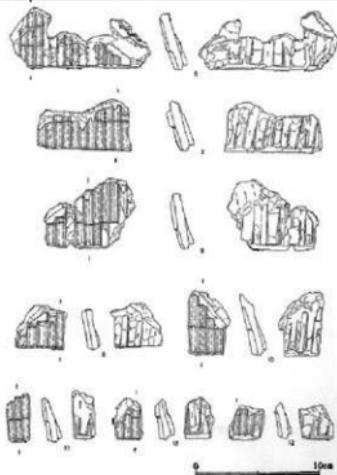
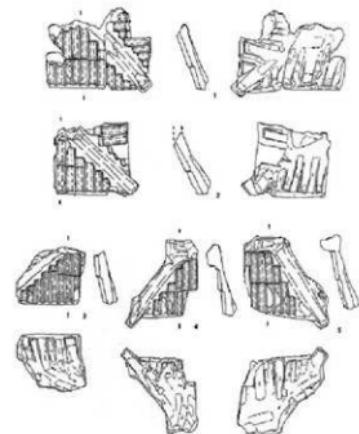


第37図 石原山瓦窓跡

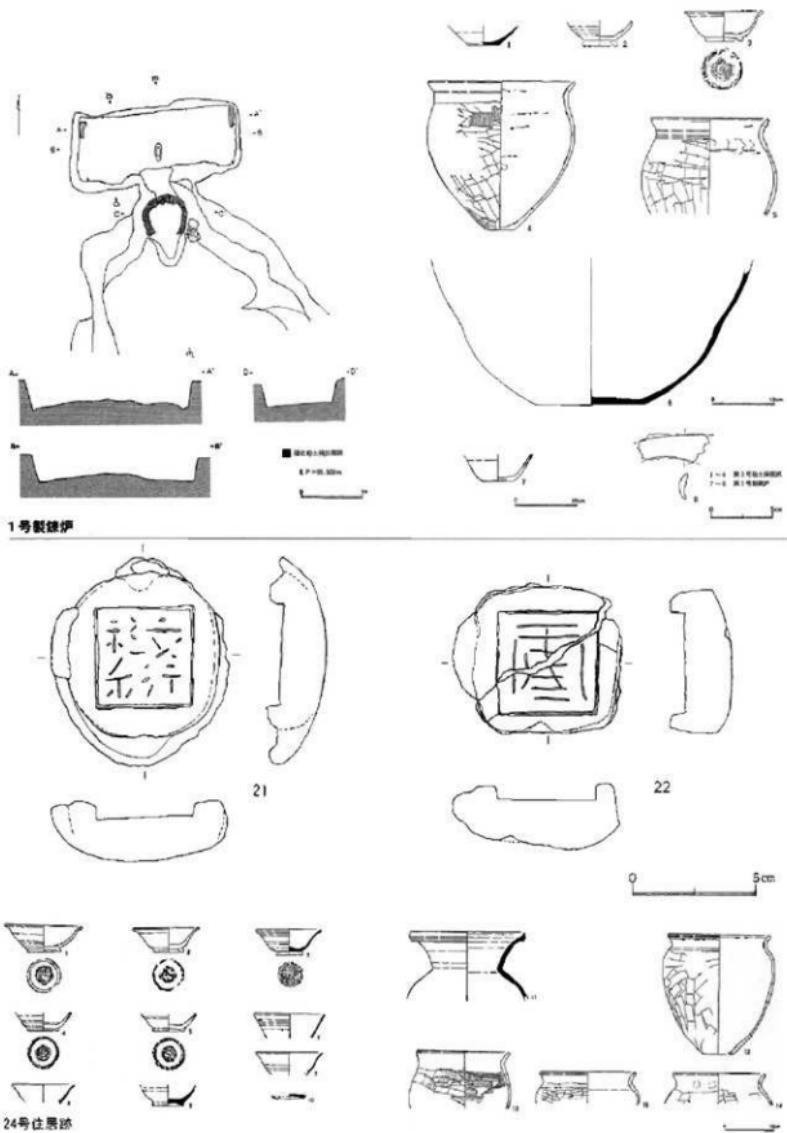


10cm

第38図 寺山遺跡



第39図 藤の木遺跡



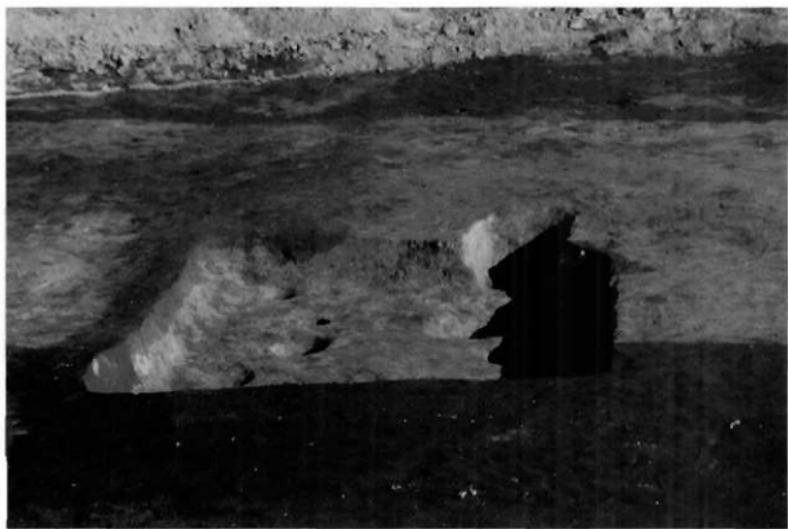
第40図 中山遺跡

写 真 図 版

図版 1



下道南遺跡全景



下道南遺跡 1号住居跡完掘状況

図版 2



1号住居跡遺物出土状態（1）



1号住居跡遺物出土状態（2）

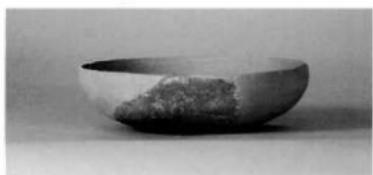
図版 3



1号住居跡No.2



1号住居跡No.4



1号住居跡No.3



1号住居跡No.10



1号住居跡No.7



下道南遺跡採集埴輪No.1



下道南遺跡採集埴輪No.2



下道南遺跡採集埴輪No.3

報告書抄録

ふりがな	しもみぬみいせき							
書名	下道南遺跡							
副書名								
シリーズ	深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第80集							
編著者名	鳥羽政之							
編集機関	深谷市教育委員会							
所在地	〒366-0823 深谷市木住町17番地 3 Tel.048(572)9581							
発行日	平成18年10月31日							
しょくしょくせき 所収遺跡	しょくせいち 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
しもみぬみいせき 下道南遺跡	埼玉県深谷市 橋浜新田171番地	11218	21	36° 12' 26"	139° 13' 32"	平成元年12月6日から 平成元年12月22日まで	147.07	工場 (駐車場)
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
集落跡	奈良時代	堅穴住居跡	土器 石器 須恵器					

下道南遺跡

2006年10月31日

編集発行 深谷市教育委員会

埼玉県深谷市本住町17-3

印 刷 朝日印刷株式会社